殉教の勧め

オリゲネス
藤遥　制作

1〜5章　患難に患難を、望みに望みを

1:1 『乳離れした者たち、乳ぶさから引き離された者たちよ、患難に患難を待ち受けよ。望みに望みを待ち受けよ。なお少し、なお少し。くちびるのあなどりのゆえに、ほかの舌によって』（イザヤ二八・九〜一一）[1]。神を敬うことに篤いアンブロシオスよ、敬虔に篤いプロトクテトスよ。あなたがたは、もはや肉に属する者でも、『キリストにある』幼な子でもありません（第一コリント三・一）。あなたがたの目に見えない『背たけ』において（ルカ二・五二）、成長したのです。もはや『乳を必要として』はおらず、『堅い食物』を必要としています（ヘブル五・一二）。乳離れした者たちには、競技者に対するように、一重の患難ではなく、いわば『患難に患難』が預言されています。あなたがたも、イザヤの言う『乳離れした者たち』、『乳ぶさから引き離された者たち』です。ですから、それがどのようなことかを聞いてください。1:2 『患難に』重なる患難を退けず、気高い競技者のようにそれを待ち受ける人は、すぐに『望みに望み』をも待ち受けます。そして、『患難に』重なる患難の後まもなく、その望みを享けるのです。『なお少し、なお少し』とは、そういうことだからです。

2:1 しかし、聖書の言葉づかいとは無縁の人々が、わたしたちをあなどり、さげすむかもしれません。わたしたちを不敬虔な者とか、愚か者とか呼ぶのです。そのときには、次のことを思い起こしましょう。『望みに』重なる望みは、『なお少し』でわたしたちに与えられようとしています。その望みは、『くちびるのあなどりのゆえに、ほかの舌によって』与えられるのです。2:2 また、パウロと共に、こう考える人がいるとします。『今のこの時の苦しみは』、神から『やがてわたしたちに現されようとする栄光に比べると』、『言うに足りない』（ローマ八・一八）。わたしたちは、この苦しみによって、いわば幸いを買い取るのです。そのような人が、すぐに『望みに望み』をも待ち受けるために、『患難に患難』を待ち受けないことがあるでしょうか。とりわけ、次のことがあるのですから、なおさらです。『このしばらくの軽い患難は』、周りの事情に重荷を負わされない人々には、実際に『軽い』ものであり、そう呼ばれもします。そして、それが度を越えれば越えるほど、それだけ大きく多い『永遠の重い栄光を、わたしたちに得させる』のです（第二コリント四・一七）。ただし、それは次のときです。わたしたちを苦しめ、いわば魂を押しつぶそうとする者たちのいる、この時に、魂の主導部分を苦しいことから背けるときです。そして、目の前の苦しいことにではなく、別のものに目を注ぐときです。その別のものは、キリストにあって『規定に従って』競技した人々のために、たくわえられています（第二テモテ二・五）。こうしたことの中での忍耐のゆえに、神の恵みによってたくわえられているのです。神は恩恵を幾倍にもしてくださり、闘った人の労苦の値打ちを越えて、多くのものを賜ります。神は細かく勘定することなく惜しみなくお与えになり、ご自分の恵みを知恵をもって大きくしてくださいます。そのような神が、お与えになるにふさわしいほどのものです。神はそれを次の人々に賜ります。土の器を軽んじることによって、力のかぎり、魂を尽くした神への愛を示した人々です。

3:1 魂を尽くして神を愛するのはどのような人々か、わたしはこう思います。神と交わりたいという大きな熱意のゆえに、魂を、地上の体からだけでなく、すべての体から引き離し、切り離す人々です。いわゆる死によって『死の』からだを脱ぐ時が与えられたとき、この人々は、『卑しい』『からだ』を脱ぎ捨てます（ピリピ三・二一）。気をそらされたり、あちこちへ引きずられたりすることはありません。その時には、使徒のように祈って『わたしは、なんというみじめな人間なのだろう。だれが、この死のからだから、わたしを救ってくれるだろうか』と言った人が（ローマ七・二四）、聞き入れられるのです。実際、朽ちる体に重荷を負わされて、『幕屋の中に』いてうめく人々がいます（第二コリント五・四）。その中のだれが、先に『だれが、この死のからだから、わたしを救ってくれるだろうか』と言ったあと、感謝しないでしょうか。その人は、次のことを見ている

のです。交わり[2]を通して『死のからだから』救われたなら、自分は聖なる声をあげることになります。その声は、『わたしたちの主キリスト・イエスによって、神は感謝すべきかな』です（ローマ七・二五）。3:2もし、このようなことを難しいと思う人がいるなら、その人は、力ある『いける』『神に』『かわいた』ことがありません（詩篇四二・二）。『しかが水の泉を慕いあえぐように』、神を慕ったこともありません（詩篇四二・一）。『いったい、いつ、わたしは行って、神の御顔の前に現れるのだろうか』と言ったこともありません（詩篇四二・二）。預言者が思いめぐらしたことを、自分のうちで考えたこともありません。預言者は、『おまえの神はどこにいるのか』と言われて、『毎日』、自分の上に自分の『魂を』注ぎ出しました（詩篇四二・三〜四）。そして、弱さのためにまだうなだれ、思いみだれる自分の魂を叱って、こう言ったのです。『わたしは驚くべき幕屋の所を通って、神の家にまで行くだろう。祭を祝う者の、喜びと感謝の声の響きのうちに』（詩篇四二・四）。

4:1ですから、わたしは祈ります。あなたがたが、目の前の闘いの間ずっと、天にたくわえられている大きな報いを心に留めて、喜び、よろこび、おどるようにと。その報いは、『義のために』、また人の子のために、迫害され、ののしられた人々に、たくわえられているものです（マタイ五・一〇）。かつて使徒たちも、『御名のために恥を加えられる』に足る者とされて、喜んだのです（使徒五・四一）。4:2また、あなたがたは、魂のうちに縮こまるような思いを感じることがあるかもしれません。そのときは、わたしたちのうちにあるキリストの知性に、魂へこう言わせてください。魂は、自分にできるかぎり、その知性までもかき乱そうとしているのです。『わが魂よ、何ゆえうなだれるのか。4:3何ゆえわたしのうちに思いみだれるのか。神を待ち望め。わたしは神をほめたたえるであろう』と（詩篇四二・五）。そして、もう一度、同じことを言わせてください（詩篇四二・一一）。できることなら、魂がまったく乱されないでほしいのです。法廷そのものにあっても、首に振り下ろされる抜き身の剣の前にあっても、そうであってほしいのです。『すべての知性に』まさる神の平安に守られて（ピリピ四・七）、静まっていてほしいのです。そして、『肉体から』離れている人々は、万物の主ご自身のもとに住むのだと、考えていてほしいのです（第二コリント五・八）。しかし、わたしたちは、いつも乱されない心を保てるほどの者ではないかもしれません。それなら、せめて、魂の乱れを外にあふれさせず、外の人々に見せないようにしましょう。そうすれば、神に向かって『わが神よ、わたしの魂は、わたしのうちで乱れました』と言って（詩篇四二・五〜六）、申し開きをする余地があるのです。また、みことばは、イザヤ書でこう言われていることも心に留めるよう、わたしたちに勧めています。『人のそしりを恐れてはならない、彼らのあなどりに屈してはならない』（イザヤ五一・七）。実際、神は、天と天にあるものの動きを、はっきりと司っておられます。地と海で神の技によって成し遂げられていることも、司っておられます。あらゆる生き物と草木が生まれ、形づくられ、養われ、育つことです。それなのに、目を閉じて神を見ず、ほかの者たちを恐れて、そちらに目を向けるのは、おかしなことです。その者たちは、まもなく死んで、自分たちにふさわしい裁きに引き渡されるのです。

5:1さて、かつて神はアブラハムに『あなたの地を出よ』とおっしゃいました（創世記一二・一）。しかし、わたしたちには、おそらくまもなく、「全地から出よ」とおっしゃるでしょう。神がすみやかにわたしたちに天を示してくださるように、その言葉に従うのはよいことです。天には、天国と呼ばれるものがあるのです。5:2さて、多くの徳をめぐって、人生が闘いに満ちていることも、闘う人々がいることも、見ることができます。実際、神の分け前に属する人々のほかにも、多くの人が、節制のために闘ってきたと見えるでしょう。共通の主人のための志を守り、勇気をもって死んでいった人々もいると見えるでしょう。吟味される議論に長けた人々は、思慮に心を配ってきたと見えるでしょう。正しく生きようと志した人々は、正義に身をささげてきたと見えるでしょう。5:3そして、どの徳にも、『肉の思い』か、あるいは、外のものの多くが戦いを挑みます（ローマ八・六〜七）。しかし、敬虔のためには、ただ『選ばれた』『種族、祭司の国、聖なる国民、神につける民』だけが闘うのです（第一ペテロ二・九）。ほかの人々は、見せかけにさえ、次のような姿を示しません。敬虔な人々に敵対するものがあるとき、敬虔のために死ぬことを選ぶ姿です。不敬虔に生きるよりも、敬虔をもって死ぬことを重んじる姿です。5:4そして、選ばれた種族の者でありたいと願う人は、だれでも、神がどんな時にもお語りになる言葉に聞き従い

ます。多くの神々を拝むと称しながら、実は無神論者である人々が、その人を陥れようとするときも、同じです。その言葉とは、『あなたはわたしのほかに、なにものをも神としてはならない』です（出エジプト二〇・三）。また、『あなたがたは、他の神々の名を心に思い起してはならない。また、あなたがたの口からその名が唱えられてはならない』です（出エジプト二三・一三）。5:5それゆえ、このような人々こそ、神を『心に』『信じて義とされ、口で告白して』『救われる』のです（ローマ一〇・一〇）。この人々は、次のことを悟っているのです。心がそのように整えられて神を信じるのでなければ、義とされることはありません。言葉が心の状態と同じでなければ、救いのうちにいることもありません。5:6実際、『心に信じて義とされ』るだけで、キリストにあって目的を遂げるのに十分だと思う人々は、自分を欺いています。その人々は、『口で告白して救われる』が伴わなくても、十分だと思っているのです（ローマ一〇・一〇）。5:7また、こう言うこともできます。口が告白して『救われる』ことのないまま、『心で』神を敬うことがあるとします。それよりは、神から『遠く』離れた心を持ちながら『くちびるで』敬うことのほうが、まだありうるのです（イザヤ二九・一三、マタイ一五・八）。

訳注

1 イザヤ書のギリシア語訳の句。ヘブル語からの訳では『教訓に教訓』。

2 『交わり』を『告白』と直す説もある。

6〜10章　ねたむ神

6:1『あなたは自分のために、偶像も、どんな形も造ってはならない』とおっしゃり、その後の言葉もお続けになる方がおられます（出エジプト二〇・四）。そのかたは、『それを拝してはならない』と『それに仕えてはならない』とを（出エジプト二〇・五）、互いに違うこととして語っておられるのでしょう。そうだとすれば、おそらく、偶像に心を寄せている人は、偶像に仕えるのです。一方、偶像に心を寄せてはいないのに、臆病のために、偶像に向かってうわべを装う人がいます。その人は、その臆病を、人に合わせることだと称します。そして、大勢の人と同じように敬虔だと見られるために、偶像に仕えはしなくても、拝しはするのです。6:2また、わたしはこう言いましょう。法廷で、あるいは法廷に出る前に、キリスト教を誓って捨てる人々は、偶像に仕えはしなくても、拝しはするのです。主なる神の名である『神』という名を、むなしい、いのちのない物質に当てているのです。6:3民は『モアブの娘たちと』交わって汚されましたが（民数記二五・一）、そのときも、このように偶像を拝しはしても、仕えはしなかったのです。現に、文字どおりこう書かれています。『娘たちが偶像に犠牲をささげる時に民を招くと、民はその犠牲を食べ、娘たちの偶像を拝した。そして、ペオルのバアルの祭儀にあずかった』（民数記二五・二〜三）。6:4よく見てください。「そして、娘たちの偶像に仕えた」とは言われていません。実際、あれほど多くの『しるしと奇跡』の後です（ヨハネ四・四八）。民は女たちと姦淫を共にしていました。しかし、ほんの一時のうちに、その女たちに説き伏せられて偶像を神々と思うようになることは、ありえなかったのです。6:5出エジプト記の子牛造りのときにも、民はおそらく、このように『拝した』のでしょう（出エジプト三二・八）。自分たちの目の前で造られた子牛に、仕えたのではありません。ですから、わたしたちは、今の試みを、神への愛を試し、吟味するために起こったものと考えなければなりません。6:6申命記に書いてあるとおり、『主はあなたがたを試みる』からです。『あなたがたが心をつくし、魂をつくして、あなたがたの神、主を愛するか、どうかを知ろう』となさるのです（申命記一三・三）。6:7しかし、あなたがたは試みられても、『あなたがたの神、主に従って歩み、彼を恐れ、その戒めを守る』べきです（申命記一三・四）。とりわけ、『あなたはわたしのほかに、なにものをも神としてはならない』という戒めを守るべきです（出エジプト二〇・三）。そして、『その言葉に聞き従い、彼に加えられる』べきです（申命記一三・四）。主は、あなたがたをこの地の場所からお取りになり、ご自分に加えてくださるのです。使徒がそう名づけたとおり、ご自分のうちにある『神による成長』へと加えてくださるのです（コロサイ二・一九）。

7:1また、『すべての』悪い『言葉』は、あなたの神、『主の忌みきらうもの』です（マタイ一二・三六、箴言一五・二六）。そうであれば、否むという悪い言葉は、どれほど大きな『忌みきらうもの』と考えなければならないでしょうか。ほかの神を宣言する悪い言葉も、人間の守護霊にかけて誓う悪い誓いも、同じです。守護霊とは、実体のないものです。7:2このような誓いを求められたときには、『しかし、わたしはあなたがたに言う。いっさい誓ってはならない』とお教えになった方を、思い起こさなければなりません（マタイ五・三四）。実際、天をさして誓う者は、神の御座に対して法を犯します。地をさして誓う者は、『神の足台』と呼ばれるものを神にして、不敬虔を犯します（マタイ五・三五、イザヤ六六・一）。エルサレムは大王の都であるのに、それをさして誓う者は罪を犯します。自分の頭をさして誓う者は、過ちを犯します（マタイ五・三六）。そうであれば、ある人の守護霊をさして誓うことは、どれほど大きな罪と考えなければならないでしょうか。7:3また、そのときには、次の言葉も思い起こさなければなりません。あらゆる無益な言葉について、あなたがたは『審判の日に言い開き』をすることになる、という言葉です（マタイ一二・三六）。否むときの誓いほど無益な言葉が、ほかにあるでしょうか。7:4しかし、敵は、できるかぎりの

手段で、わたしたちを言いくるめようとするでしょう。わたしたちに、『日や月やその他の天の万象を』拝させようとするのです（申命記一七・三）。7:5しかし、わたしたちはこう言いましょう。神の言葉は、そのようなことを『命じなかった』のです（申命記一七・三）。実際、被造物を決して拝してはなりません。創造者がそこにおられ、すべての人の祈りに十分にお応えになり、その祈りにまで届いてくださるのですから。7:6太陽自身も、神の分け前に属する人々から拝されることを望まないでしょう。おそらく、ほかのだれからも望まないでしょう。そうではなく、太陽は、次のようにお語りになった方に倣うでしょう。『なぜわたしをよき者と言うのか。7:7父なる神ひとりのほかによい者はいない』（マルコ一〇・一八、ルカ一八・一九）。そして、自分を拝そうとする人に、いわばこう言うでしょう。「なぜ、わたしを神と言うのか。まことの神は、ひとりだけだ。なぜ、わたしを拝するのか。7:8『主なるあなたの神を拝し、ただ神にのみ仕えよ』と書いてあるからだ（マタイ四・一〇）。わたしも造られたものだ。なぜ、拝する者を拝そうとするのか。わたしも、父なる神を拝し、神に仕えている。そして、神の命令に従って、『服従させたかたによって、望みをもって』、『虚無に』服しているのだ（ローマ八・二〇）。今は、わたし自身も朽ちる体に縛られている。しかし、『滅びのなわめから』解放されて、『神の子たちの栄光の自由に』入るだろう（ローマ八・二一）」。

8:1また、不敬虔の預言者が現れることも、予期しておくことができます。おそらく一人ではなく、何人もいるでしょう。その者たちは、主が『命じなかった言葉』を、主の言葉としてわたしたちに語るでしょう（申命記一八・二〇）。また、知恵とは無縁の言葉を、知恵の言葉として語るでしょう。そうして、その預言者は、自分の口の言葉によって、わたしたちを殺そうとするのです。8:2しかし、そのときにも、罪人がわたしたちに逆らって立つ間、こう言いましょう。『しかしわたしは耳しいのように聞かず、おしのように口を開きません。わたしは聞かない人のようになりました』（詩篇三八・一三〜一四）。8:3実際、より悪いことを語る人々の立ち直りをあきらめるときには、不敬虔な言葉に対して耳しいになるのがよいのです。

9:1反対のことへと誘う者たちのいる時には、次のことを考えるのが有益です。神は、何を教えようとなさって、『あなたの神、主であるわたしは、ねたむ神である』とおっしゃるのでしょうか（出エジプト二〇・五）。わたしはこう思います。花婿は、たとえ賢い者であっても、花嫁を慎み深い生活へと立ち帰らせようとするとき、ねたみを見せるでしょう。花嫁が自分のすべてを花婿のもとに集め、花婿のほかのだれかのほうへ流れ出ないよう、あらゆる仕方で身を守るようにするのです。花婿は、そのようにねたみを見せることを、いわば薬として花嫁に用いるのです。同じように、お告げをお語りになる方は、花嫁である魂に向かって、ご自分は『ねたむ』『神』であるとおっしゃいます。そのかたが『すべての造られたものの長子』であると見えるなら、なおさらです（コロサイ一・一五）。こうして、聞く者たちを、悪霊どもとの、また神々と思われているものとの、あらゆる姦淫から引き離してくださるのです。そして、このように『ねたむ』『神』として、何らかの仕方でほかの神々を慕って姦淫した者たちについて、こうおっしゃいます。『彼らは神でもない者をもって、わたしにねたみを起させ、偶像をもって、わたしを怒らせた。それゆえ、わたしは民ともいえない者をもって、彼らにねたみを起させ、愚かな民をもって、彼らを怒らせるであろう。わたしの怒りによって、火は燃えいで、陰府の深みにまで燃え行く』（申命記三二・二一〜二二）。

10:1花婿は賢く、情念に動かされないので、自分のためには、婚約した花嫁をあらゆる汚れから引き離さないかもしれません。それでも、花嫁のためには、そうするでしょう。花嫁の汚れと忌まわしさを見て、花嫁をいやし、立ち帰らせることのできることを、すべて行うのです。花嫁は自由意志を持つ者なので、花婿は、姦淫から引き離す言葉を花嫁に語りかけるのです。10:2では、魂がどのような仕方であれ、ほかの神を宣言し、まことに唯一の、ただひとりの主を告白しないとします。それよりも悪い汚れが魂に生じることを、あなたは思いつくことができるでしょうか。わたしはこう思います。『遊女につく者はそれと一つのからだになる』ように（第一コリント六・一六）、だれかを告白する人は、告白する相手と混じり合い、一つになります。責め苦と信仰の吟味の時に告白する人は、とりわけそうです。一方、否む人の場合は、否むことそのものが、剣のように、

否む相手からその人を断ち切ります。こうして、その人は分かたれることを身に受け、否んだ方から引き離されるのです。10:3ですから、考えてみてください。次の言葉は、こういうことを言っているのではないでしょうか。告白する者には告白されることが、否む者には否まれることが、当然の帰結として必ず起こるということです。その言葉とは、『人の前でわたしを告白する者を、わたしもまた、天にいますわたしの父の前で告白するであろう』です（マタイ一〇・三二）[1]。10:4ロゴスそのものであり、真理そのものである方は、告白した人にも否んだ人にも、こうおっしゃるでしょう。「『あなたがたの量るその量りで、自分にも量りかえされる』（ルカ六・三八、マタイ七・二、マルコ四・二四）。あなたは、わたしへの告白の量りで量り、告白の量りを満たした。だから、わたしからの告白の量りを、『ゆすり入れ、おし入れ、あふれ出るまでに』受けるだろう（ルカ六・三八）。それは、あなたの『ふところに』与えられる。一方、あなたは、否むことの量りで量り、わたしを否んだ。だから、その否むことの量りに見合って、わたしがあなたを否む、その量りを受けるだろう」。

訳注

1 続く『人の前でわたしを否む者』の句が落ちたとみる説もある。

11〜13章　自分を否み、十字架を負う

11:1 告白の量りは、どのようにして満たされるのでしょうか。また、どのようなとき、満たされずに欠けるのでしょうか。それは、次のように考えることができるでしょう。吟味と試みの時の全体を通じて、わたしたちが自分の心の中に、悪魔に場所を与えないとします。悪魔は、悪い考えでわたしたちを汚そうとしています。否むことの、二心の、あるいは殉教と完全さに敵対することへと誘う何かもっともらしい理屈の、悪い考えです。さらに、告白と無縁の言葉で、少しも自分を汚さないとします。また、反対する者たちから受けるそしりも、あざけりも、物笑いも、悪口も、あわれみも、すべて耐えるとします。彼らは、わたしたちを迷った者、愚かな者と思い、道を誤った者と呼んで、あわれんでいるつもりなのです。そのうえ、子供たちや、その母や、この生で最も親しいと思われているだれかへの情愛があります。その情愛に引き回されて、財産やこの生のほうへ引き寄せられることもないとします。そうではなく、これらすべてに背を向けて、まったく神のもの、また、神と共に神のもとにあるいのちのものとなるとします。神のひとり子と、ひとり子にあずかる者たちとに、やがて交わる者として、そうなるのです。そのとき、わたしたちは、告白の量りを満たした、と言うことができるでしょう。しかし、ただ一つのことにでも欠けるなら、わたしたちは告白の量りを満たしたのではありません。かえって、告白の量りを汚し、そこに無縁のものを混ぜたのです。11:2 ですから、わたしたちは、ある人々が必要とするものを、必要とすることになるでしょう。土台の上に『木』や『草』や『わら』を用いて建てた人々です（第一コリント三・一二）。

12:1 また、わたしたちは、次のことも知らなければなりません。神の契約と呼ばれるものを、わたしたちは取り決めに基づいて受けたのです。その取り決めは、キリスト教にしたがって生きることを引き受けたときに、わたしたちが神と交わしたものです。そして、神とのわたしたちの取り決めの中には、福音にしたがった生き方のすべてがありました。福音はこう言っています。『だれでもわたしについてきたいと思うなら、自分を否み、自分の十字架を負うて、わたしに従ってきなさい。12:2 自分の魂を救おうと思う者はそれを失い、わたしのために自分の魂を失う者は、それを救うであろう』（マタイ一六・二四〜二五）。わたしたちはまた、次の言葉を聞いて、何度も、いっそう奮い立たされてきました。『たとい人が全世界をもうけても、自分の魂を損したら、なんの得になろうか。12:3 また、人は自分の魂の代わりに、何を与えることができようか。人の子は父の栄光のうちに、御使たちを従えて来るが、その時には、実際のおこないに応じて、それぞれに報いるであろう』（マタイ一六・二六〜二七）。自分を否み、自分の十字架を負うて、イエスに従わなければなりません。このことを書いたのは、その言葉をわたしたちが引いたマタイだけではありません。ルカもマルコも書いています。12:4 聞いてください。ルカは、イエスが『みんなの者に言われた』ことを、こう書いています。『だれでもわたしについてきたいと思うなら、自分を否み、自分の十字架を負うて、わたしに従ってきなさい。12:5 自分の魂を救おうと思う者はそれを失い、わたしのために自分の魂を失う者は、それを救うであろう。人が全世界をもうけても、自分自身を失いまたは損したら、なんの得になろうか』（ルカ九・二三〜二五）。また、マルコは、イエスが『群衆を弟子たちと一緒に呼び寄せて、彼らに言われた』ことを、こう書いています。『だれでもわたしについてきたいと思うなら、自分を否み、自分の十字架を負うて、わたしに従ってきなさい。12:6 自分の魂を救おうと思う者はそれを失い、福音のために失う者は、それを救うであろう。人が全世界をもうけても、自分の魂を損したら、なんの得になろうか。12:7 また、人は自分の魂の代わりに、何を与えることができようか』（マルコ八・三四〜三七）。ですから、わたしたちはとうの昔に、自分を否み、『生きているのは、もはや、わたしではない』と言っているべきなのです（ガラテヤ二・二〇）。そして今こそ、明らかにされなければなりません。わたしたちが自分の十字架を負うて、イエスに従ってきたかどうかがです。そのこ

とは、『キリストが』わたしたちのうちに『生きておられる』なら、実際に起こっているのです（ガラテヤ二・二〇）。12:8 わたしたちが、自分の『魂を救おう』と思うなら（マルコ八・三五）、殉教によってこそ、魂を失いましょう。魂よりもすぐれたものとして、魂を取り戻すためです。キリストのために魂を失い、キリストのゆえの死において、魂をキリストにゆだねるとします。そうすれば、わたしたちは、魂のためにまことの救いを得ることになります。しかし、その反対であれば、次の言葉を聞くことになります。感覚で捉えられる全世界をもうけても、自分自身を失い、あるいは損してのことなら、なんの得にもならない、という言葉です（ルカ九・二五、マタイ一六・二六、マルコ八・三六）。12:9 ひとたび自分の魂を失い、あるいは損した人がいるとします。その人は、たとい全世界をもうけても、その世界を、失われる『魂の代わり』として与えることはできません（マタイ一六・二六、マルコ八・三七）。『神のかたちに』造られた魂は（創世記一・二七）、すべての体よりも尊いからです。12:10 先に失われていたわたしたちの『魂の代わり』を与えることのできた方は、ただひとりです。ご自分の『尊い血』で、わたしたちを買い取ってくださった方です（第一ペテロ一・一九）。

13:1 また、何らかの、より深い意味に従って、イザヤはこう言っています。『わたしはエジプトとエチオピヤとスエネとを、あなたのために、あなたの代わりとして与えた。それ以来、あなたはわたしの前に尊い者となった』（イザヤ四三・三〜四）。13:2 あなたがたが、キリストにあって学ぶことを愛し、『鏡に映して』『なぞのうちに』学ぶことを（第一コリント一三・一二）、今こそ越えたいと願うとします。そして、召してくださった方のもとへ急ぐとします。そうすれば、あなたがたは、このことと、ほかのことについての正確な説明を、ほどなく『顔と顔とを合わせて』知るでしょう（第一コリント一三・一二）。天にいます父であり、師である方の、友として知るのです。13:3 友は、はっきりとした姿において学び、なぞによって学ぶのではありません。声や言葉やしるしや型だけの知恵によって学ぶのでもありません。知性で捉えられるものの本性と、真理の美しさとに、じかに触れるのです。13:4 パウロは『第三の天に』引き上げられました（第二コリント一二・二）。また、『パラダイスに引き上げられ、そして口に言い表わせない、人間が語ってはならない言葉を聞いた』のです（第二コリント一二・四）。あなたがたが、このことを信じているとします。そうであれば、当然、次のことも知るでしょう。そのときパウロに現された言い表わせない言葉よりも、多く、また大いなることを、あなたがたは、すぐに知ることになるのです。パウロは、その言葉の後、第三の天から下ってきました。しかし、あなたがたは、知った後、下ってくることはありません。それは、あなたがたが十字架を負うて、イエスの後に従うならです。わたしたちには、このイエスが、『もろもろの天をとおって行かれた大祭司』としておられます（ヘブル四・一四）。あなたがた自身も、このかたの後ろから離れずに、もろもろの天をとおって行くでしょう。地と、地にかかわる奥義を越えるだけでなく、天と、天にかかわる奥義をも越えるのです。13:5 神のうちには、これらよりはるかに大いなる光景が、たくわえられているからです。体のうちにあるものは、どんな本性であっても、まずあらゆる体から解き放たれなければ、その光景を受け入れることはできません。わたしは確信しています。太陽と月と星の群れが見たもの、さらに聖なる御使いたちの群れが見たものがあります。神は、それよりもはるかに大いなるものを取っておかれ、ご自分のもとに守っておられるのです。神は御使いたちを『風』とされ、『炎』とされました（ヘブル一・七、詩篇一〇四・四）。神がそれらを現されるのは、すべての『被造物』が、『敵のなわめから』解放されて、『神の子たちの栄光の自由に』入るときです（ローマ八・二一）[1]。

訳注

1 一部の写本と聖書の本文では『滅びのなわめから』。

14〜17章　捨てたものの幾倍もを受ける

14:1 ですから、キリストにあって学ぶことを愛する心を、多くの殉教者より豊かに持つ、殉教を前にした人々がいます。そのうちのだれかは、さらにその先へと、いっそう速やかに昇っていくでしょう。聖なるアンブロシオスよ、あなたは福音書の言葉をよく見つめれば、次のことを見て取ることができます。格別の、より豊かな至福が注がれるのを受ける人は、いつの世の人のうちにも、ひとりもいないか、いてもごくわずかでしょう。あなたが、ためらうことなくこの闘いを泳ぎ渡るなら、あなたもその至福の中にいることになるのです。14:2 その言葉は、次のとおりです。あるとき、ペテロが救い主に言いました。『ごらんなさい、わたしたちはいっさいを捨てて、あなたに従いました。ついては、何がいただけるでしょうか。イエスは彼らに言われた』（つまり使徒たちにです）。『よく聞いておくがよい。世が改まって、神が[1]その栄光の座につく時には、わたしに従ってきたあなたがたもまた、十二の位に座してイスラエルの十二の部族をさばくであろう。14:3 おおよそ、わたしの名のために、兄弟、姉妹、両親、子、畑、もしくは家を捨てた者は、その幾倍もを受け、また永遠のいのちを受けつぐであろう』（マタイ一九・二七〜二九）。14:4 この言葉のゆえに、わたしが、あなたが持っているほどのものを、地上で手に入れていたとします。あるいは、それより多くのものを手に入れていたとします。そうであれば、わたしは、キリストにあって神の殉教者となることを祈り求めたでしょう。『幾倍も』を受けるためです（マタイ一九・二九）。あるいは、マルコの言うように『百倍』を受けるためです（マルコ一〇・三〇）。それは、わたしたちが殉教に召されたときに残していく、わずかなものが百倍にされたものです。残していくわずかなものより、はるかに多いのです。14:5 このために、もしわたしが殉教するなら、子供たちをも、畑や家と共に残していけたらと思います。わたしたちの主イエス・キリストの父である神のもとでも、幾倍もの、より聖なる子供たちの父と呼ばれるためです。この神こそ、『天上にあり地上にあって父と呼ばれているあらゆるものの源』です（エペソ三・一五）。はっきり言うなら、百倍の子供たちの父と呼ばれるためです。14:6 アブラハムへの言葉に、『あなたはよい老年まで養われ、安らかに父たちのもとに行きます』とあります（創世記一五・一五）。この父たちがいるのなら、ある人は（本当かどうかわたしにはわかりませんが）こう言うかもしれません。その父たちとは、おそらく、かつて殉教し、子供たちを残していった人々なのでしょう。その代わりに、族長アブラハムや、ほかの同じような族長たちの、父たちの父となったのです。子供たちを残して殉教した人々が、幼子たちではなく、父たちの父となるのは、ありそうなことだからです。

15:1 さて、ある人が、いわば、より大いなる賜物を熱心に求めるとします。そして、富んでいる殉教者たちと、父である殉教者たちとを、幸いだと言うとします。この殉教者たちは、『百倍』の子供たちを生み、百倍の畑と家とを受けることになります。そして、その人が、こう問うとします。この人々が、この世の生で貧しかった殉教者たちに比べて、知性で捉えられるものの中の財産を、幾倍にも増して持つことになる。それは筋の通ったことだろうか、と。その人には、こう言わなければなりません。責め苦と苦しみを耐え忍んだ人々は、そうしたことで試されなかった人々よりも、殉教における徳を、いっそう輝かしく示しました。同じように、体を愛し、いのちを愛する心に加えて、これほど多くの世の縛りをも断ち切り、引き裂いた人々がいます。この人々は、神への大きな愛を働かせたのです。そして、生きていて力があり、『もろ刃のつるぎよりも』鋭い神の言葉を、まことに身に受けたのです（ヘブル四・一二）。この人々は、これほど多くの縛りを断ち切りました。そして、鷲のように自分のために翼を備えて、自分たちの『主人の家に』帰ることができたのです（箴言二三・五）。15:2 ある人々は、関節をはずす責め具や、さまざまな拷問台や、火の中で忍耐を示しました。ですから、責め苦と苦しみの中で試されなかった人々は、この人々に第一の座を譲るのがふさわしいことです。同じように、わたしたち貧しい者も、たとい

殉教するとしても、あなたがたに第一の座を譲るべきだと、道理が告げています。あなたがたは、キリストにある、神への愛のゆえに、人を欺く名声を踏みつけています。その名声は、多くの人をとらえるものです。また、これほどの財産と、子供たちへの情愛とをも、踏みつけているのです。

16:1 それと同時に、聖書の慎み深さにも目を留めてください。聖書は、兄弟、子、両親、畑、家が幾倍にも、百倍にもなることを約束しています。しかし、そこに妻は数え入れられていません[2]。16:2「おおよそ、わたしの名のために、兄弟、姉妹、両親、子、畑、家、もしくは妻を捨てた者は、その幾倍もを受ける」とは書かれていません。『死人の復活の時には、めとったり、とついだりすることはない。彼らは天にいる御使のようなものである』からです（マタイ二二・三〇、マルコ一二・二五）。

17:1 ですから、ヨシュアが民を聖なる地に住まわせたときに言ったことを、今、聖書はわたしたちにも語ることができるでしょう。その言葉は次のとおりです。『いま、あなたがたは主を恐れ、まっすぐな心と義とをもって、主に仕えなさい』（ヨシュア二四・一四）。また、偶像を拝むようにと説き伏せられようとしているわたしたちに、聖書は、続く次の言葉も語るでしょう。『あなたがたの先祖が、川の向こう、およびエジプトで仕えた他の神々を除き去って、主に仕えなさい』（ヨシュア二四・一四）。初めのころ、あなたがたが洗礼前の教えを受けようとしていたときなら、こう言われても、もっともだったでしょう。『もしあなたがたが主に仕えることを、こころよしとしないのならば、あなたがたの先祖が、川の向こうで仕えた神々でも、または、あなたがたの住む地のアモリびとの神々でも、あなたがたの仕える者を、きょう、選びなさい』（ヨシュア二四・一五）。そして、あなたがたを教える人は、こう言ったことでしょう。『わたしとわたしの家とは主に仕えます。主は聖なる方だからです』（ヨシュア二四・一五）。しかし今は、このようなことをあなたがたに言う余地はありません。あなたがたは、そのときに、こう言ったからです。『主を捨てて、他の神々に仕えるなど、われわれは決していたしません。17:2 われわれの神、主こそ神です。このかたが、われわれと、われわれの先祖とを、エジプトから導き上り、われわれの行くすべての道で守ってくださったのです』（ヨシュア二四・一六〜一七）。そればかりか、あなたがたは以前、神を敬うことについての取り決めの中で、あなたがたを教える人々に、こう答えました。『われわれも主に仕えます。主はわれわれの神だからです』（ヨシュア二四・一八）。人と交わした取り決めを破る者でさえ、和を結ぶすべのない者であり、救いから遠い者だとします。それなら、否むことによって、自分が神と交わした取り決めを無にする人々については、何と言うべきでしょうか。その人々は、洗礼を受けるときに縁を切ったサタンのもとへ、逆戻りしているのです。17:3 そのような場合には、エリが息子たちに語った言葉を言わなければならないからです。『もし人が人に対して罪を犯すならば、人々は彼のために祈るであろう。しかし人が主に対して罪を犯すならば、だれが彼のために祈るであろうか』（第一サムエル二・二五）。

訳注

1 福音書の本文では『人の子が』。

2 ルカ福音書では『妻』も挙げられている。

18〜21章　天と陰府が見つめる闘い

18:1 闘い、殉教に召されているあなたがたのために、大きな劇場が組まれています。それはちょうど、名だたる競技者と見なされている人々のために、そのようなことが起こると言うようなものです。その闘いを見ようと、数えきれないほどの人々が集まるのです[1]。18:2 あなたがたは闘うとき、パウロに劣らず、こう言うことになるでしょう。『わたしたちは、全世界に、御使いにも人々にも劇場とされた』（第一コリント四・九）。ですから、キリスト教のための闘いを闘うわたしたちのことを、全世界が聞くことになるのです。右と左のすべての御使いも、すべての人々も聞きます。神の分に属する人々も、ほかの人々もです。18:3 そして、天にいる御使いたちが、わたしたちのことを喜ぶでしょう。そのときには、『大水は共に手を打ち、もろもろの山は喜び歌うであろう』（詩篇九八・八）。『また、野にある木はみな、枝で手を打つであろう』（イザヤ五五・一二）。さもなければ、そうならないように願いますが、人の不幸を喜ぶ下の力どももまた喜ぶでしょう。18:4 陰府にいる者たちは、打ち負かされ、天の殉教から落ちた人々に何と言うでしょうか。それを、イザヤが書いたことから見ても、少しもおかしくはありません。否むことの不敬虔に、わたしたちがいっそうおののくためです。18:5 わたしは、否んだ者には、次のようなことが言われるだろうと思います。『下の陰府は、あなたを迎えて苦い思いをした。地を治めた巨人たち、国々のもろもろの王をその王座から立ちあがらせた者たちが、みなあなたのために起き上がった。18:6 彼らはみな答えて、あなたに言うであろう』（イザヤ一四・九〜一〇）[2]。打ち負かされた力どもは、打ち負かされた人々に何と言うでしょうか。悪魔に捕らえられた者たちは、否むことのうちに捕らえられた人々に何と言うでしょうか。それは、いったい何でしょうか。18:7 『あなたもまた、われわれのように捕らえられ、われわれのうちに数えられた』（イザヤ一四・一〇）。また、ある人が、神にある、大きく栄光ある望みを持っていたとします。その人が、臆病のために、あるいは加えられる苦しみのために、神にあって敗れることがあるとします。その人は、こう聞くことになります。『あなたの栄光、あなたの多くの楽しみは陰府に下った。あなたの下には腐れが敷かれ、うじがあなたの覆いとなる』（イザヤ一四・一一）。また、ある人が、たびたび教会に『明けの明星』のように現れて、輝いていたとします。そして、その人のよいおこないが『人々の前に』輝いていたとします（マタイ五・一六）。それなのに、その後、大きな闘いを闘っていながら、これほどの座の冠を失ってしまったとします。その人は、こう聞くことになります。『朝早く昇る明けの明星は、どうして天から落ちたのか。18:8 地に打ち砕かれた』（イザヤ一四・一二）。否むことによって悪魔に似た者となったその人には、次のことも言われるでしょう。『あなたは、忌みきらわれる死体のように、山々に投げ捨てられる。つるぎで刺し殺されて陰府に下る、多くの死人と共にである。18:9 血に染まった衣が清くならないように、あなたも清くならない』（イザヤ一四・一九〜二〇）。血と殺し、すなわち否むという忌まわしい過ちに汚され、これほどの悪に染まった者が、どうして清くありえるでしょうか。18:10 今こそ、『わたしよりもむすこや娘を愛する者は、わたしにふさわしくない』という言葉を聞いたことを、示しましょう（マタイ一〇・三七）。否むべきか告白すべきかについて、ためらいがわたしたちのうちに少しでも生じないように、気をつけましょう。エリヤの言葉が、わたしたちにも言われないためです。その言葉は、こうです。『あなたがたはいつまで二つのものの間に迷っているのですか。主が神ならばそれに従いなさい』（列王紀上一八・二一）。

19:1 わたしたちは、隣り人からそしられ、わたしたちを取り囲む人々から侮られることでしょう。その人々は、愚か者に向かってするように、わたしたちに頭を振るでしょう。しかし、そのようなことが起こるとき、わたしたちは神にこう言いましょう。『あなたはわれらを隣り人のそしりとし、われらをめぐる者どもの侮りと物笑いとされました。19:2 もろもろの国民のなかにわれらを笑い草と

し、もろもろの民のなかに頭を振られる者とされました。わがはずかしめはひねもすわたしの前にあり、恥はわたしの顔をおおいました。そしる者と、ののしる者の声により、敵と、迫害する者のゆえによるのです』（詩篇四四・一三〜一六）。これらすべてのことが起こるときにも、預言者が大胆に、これに続けて言った言葉を神に言うことは、幸いです。その言葉とは、『これらの事が皆われらに臨みましたが、19:3 われらはあなたを忘れず、あなたの契約にそむくことがありませんでした。われらの心はたじろぎませんでした』です（詩篇四四・一七〜一八）。

20:1 次のことを思い起こしましょう。わたしたちは、この生のうちにいながら、この生の外にある道を悟っているので、神にこう言うのです。『あなたはわれらの小道を、あなたの道からそらされました』（詩篇四四・一八）[3]。今は、次のことを思い起こす時です。わたしたちが低くされているこの場所は、魂の苦しみの所なのです。わたしたちが祈るとき、『あなたは苦しみの所でわれらを低くし、死の陰がわれらをおおいました』と言うためです（詩篇四四・一九）。また、勇気をもって、次の言葉も言いましょう。『われらがもしわれらの神の名を忘れ、ほかの神に手を伸べたことがあったならば、神はこれを見あらわされないでしょうか』（詩篇四四・二〇〜二一）。

21:1 人の前でのあかし（殉教）だけでなく、隠れたところでのあかしをも、完全に身に負うように闘いましょう。わたしたちもまた、使徒のように声をあげて、こう言うためです。『わたしたちの誇、すなわち良心のあかしは、これである。わたしたちが神の神聖と真実とによって』、『この世で行動してきたことである』（第二コリント一・一二）。使徒の言葉に、預言者の言葉をつなぎましょう。『神は』わたしたちの『心の秘密を知っておられる』という言葉です（詩篇四四・二一）。とりわけ、わたしたちが死に引かれていくときには、そうです。そのとき、わたしたちは、殉教者たちだけが神に言う言葉を言うことになります。『われらはあなたのためにひねもす殺されて、ほふられる羊のようにみなされました』（詩篇四四・二二）。もし、『肉の』思いから、死をもってわたしたちを脅す裁判官たちへの恐れが、わたしたちに忍び込むことがあるとします（ローマ八・六〜七）。そのときには、彼らに箴言の言葉を言いましょう。『子よ、主を敬え。そうすれば強くなる。主のほかには、だれも恐れるな』（箴言七・一）[4]。

訳注

1 この語は本文が崩れている。『集まる』の意と解した。
2 イザヤ書のギリシア語訳の句。ヘブル語からの訳とは文言が違う。
3 詩篇のギリシア語訳の句。ヘブル語からの訳では『道を離れませんでした』。
4 箴言のギリシア語訳にだけある句。ヘブル語からの訳にはない。

22〜27章　エレアザルと七人の兄弟と母

22:1 次のことも、いま論じていることに役立ちます。ソロモンは伝道の書で、こう言っています。『わたしは、今なお生きている生存者よりも、死んだ者をみなほめた』（伝道の書四・二）。自分から選んで、敬虔のために死を引き受けた人ほど、理にかなってほめられる死者が、ほかにいるでしょうか。22:2 エレアザルがそうでした。彼は、『汚れた生よりも、誉れある死を引き受け、自分から選んで拷問台に進み出た』のです（第二マカバイ六・一九）。彼は、『りっぱな考えをいだいて』いました。それは、『九十歳という自分の年齢と、老年の威厳と、自ら得た輝かしい白髪に、ふさわしい』考えでした。また、『幼い時からの最良の育ち、いや、むしろ聖なる、神が定めた律法に』ふさわしい考えでした（第二マカバイ六・二三）。そして、彼はこう言いました。『わたしたちの年齢で偽るのは、ふさわしくない。偽れば、若い人々の多くが、九十歳のエレアザルは異邦人の風習に変わったと思うだろう。そして、彼らもまた、わたしの偽りのために、また、わずかなつかのまの命のために、わたしのせいで迷うことになる。わたしは、老年に汚れと恥を招くことになる。22:3 わたしは今は人からの罰を逃れても、全能者の御手からは、生きていても死んでも逃れられない。だから、今いさぎよく命を終えれば、わたしは老年にふさわしい者となる。そして、尊く聖なる律法のために、進んで雄々しく、りっぱに死ぬための、気高い手本を若い人々に残すことになる』（第二マカバイ六・二四〜二八）。わたしは、こう願っています。あなたがたが死の門、いや、むしろ自由の門のそばに来たとき、とりわけ苦しみが加えられるなら（敵対する力の企てによって、あなたがたが苦しむことも、ありうるからです）、次のように言ってほしいのです。『聖なる知識を持っておられる主には、次のことが明らかである。わたしは死を免れることができるのに、体では鞭打たれて、ひどい痛みに耐えている。しかし、魂では、主を恐れるゆえに、喜んでこれを受けているのだ』（第二マカバイ六・三〇）。エレアザルの死は、彼についてこう言われるほどのものでした。『若い人々にだけでなく、民族の大多数にも、自分の死を、気高さの手本、徳の記念として残した』（第二マカバイ六・三一）。

23:1 マカバイ記に書かれている七人の兄弟もそうです。アンティオコスは、神を敬うことにとどまり続けた彼らを、『鞭と革ひもで』苦しめました（第二マカバイ七・一）。この兄弟たちは、たくましい殉教の、最もりっぱな手本となることができるでしょう。自分が少年たちに劣る者になろうとしているのではないか、と考えてみる人には、だれにでもそうです。少年たちは、一人ひとりが責め苦を耐え忍んだだけではありません。兄弟たちが苦しめられるのを見ながら、敬虔の、力強い気概を示したのです。23:2 その中の一人は、聖書が名づけたとおり『代弁者』となって、暴君にこう言いました。『何を問いただし、知ろうとするのか。わたしたちは、父祖の律法を犯すよりは、死ぬ覚悟ができているのだ』（第二マカバイ七・二）。23:3 彼らが、火で熱した平鍋と大釜によって、どんな苦しみを耐え忍んだかを、言う必要があるでしょうか（第二マカバイ七・三）。平鍋と大釜が熱せられたのは、一人ひとりが、まず別々の苦しみを受けたうえで、その中で責めさいなまれるためでした。『代弁者』と名づけられた者は、まず舌を切られました（第二マカバイ七・四）。次に、頭の皮を周りからはがれました。そして、ほかの人々が神の律法のために割礼を受けるように、この皮はぎに耐えたのです。これによっても、神の契約の言葉を満たしているのだ、と考えたからです。23:4 アンティオコスは、それでも満足せず、彼の手足の先を切り落としました。しかも、『ほかの兄弟たちと母が見ている前で』そうしたのです（第二マカバイ七・四）。その光景によって、兄弟たちと母をも罰していたのです。これほど恐ろしいと思われていることによって、彼らの決心を動かせると思ったのです。23:5 こうして、アンティオコスは、それでも満足しませんでした。代弁者は、初めに罰せられたことによって、体のつくりの点では『役に立たなくなって』いました。それでもアンティオコスは、平鍋と大釜の『火に、まだ

息のある彼を近づけて、焼くように命じた』のです（第二マカバイ七・五）。23:6 暴君の残酷さのために、敬虔の最も気高い競技者の肉が焼かれ、その湯気が立ち上りました。そのとき、ほかの兄弟たちは、『母と共に、雄々しく死のうと互いに励まし合った』のです（第二マカバイ七・五）。彼らは、神がこれを見ておられると考えて、自分たちを力づけました。耐え忍ぶ者たちのそばに神の目がある、と信じることが、彼らには忍耐のために十分だったのです。そして、敬虔の競技者たちの競技の主催者が、彼らを励ましておられました。ご自分もまた、これほどの苦しみに立ち向かう人々のことで慰められ、こう言ってよければ、喜んでおられたのです。23:7 わたしたちも、このような中にいるときには、あの人々が互いに言った言葉を言うのがふさわしいでしょう。その言葉は、こうです。『主なる神は見ておられ、まことにわたしたちのことで慰められる』（第二マカバイ七・六）。

24:1 最初の者が、このようにして、金がるつぼで試されるように試されました。次に、二番目の者が『なぶりものにするために』引き出されました（第二マカバイ七・七）。暴君の残酷さに仕える者たちは、その『皮を髪の毛ごとはぎ取り』、苦しみを受けたその人に、考えを改めるよう呼びかけました。『体を手足の一つひとつまで罰せられる前に』、偶像への供え物を食べるかと、問いただしたのです（第二マカバイ七・七）。24:2 しかし、彼が考えを改めることを拒んだので、『次の責め苦』に引かれていきました（第二マカバイ七・八）。彼は、最後の息を引き取るまで、堅い志を守り通しました。少しもくじけず、苦しみに屈することもなく、不敬虔な者にこう言ったのです。『呪われた者よ、おまえはむしろ、わたしたちを今のこの生から解き放っているのだ。世界の王は、ご自分の律法のために死んだわたしたちを、永遠のいのちのよみがえりへとよみがえらせてくださる』（第二マカバイ七・九）。

25:1 三番目の者も、痛みを何とも思わず、神への愛のために、それを踏みにじりました。彼は、『舌を求められると、すぐに差し出し、手も勇敢に差し伸べ』ました（第二マカバイ七・一〇）。そして、こう言いました。「神の律法のために、わたしはこの舌と手を置いて行く。そして、神がご自分への敬虔の競技者たちにお返しになるような姿で、これを神から再び受けることを望んでいる」（第二マカバイ七・一一）。25:2 四番目の者も同じように責めさいなまれました。彼は、苦しめられるのに耐え、こう言いました。『人々のもとから世を去り、神からの望みを待ち、神によみがえらせていただくほうがよい』（第二マカバイ七・一四）。そのよみがえりに、暴君はよみがえりません。暴君は、『いのちに』よみがえるのではなく、そしりと永遠の恥によみがえるからです（ダニエル一二・二）。25:3 次に、アンティオコスは五番目の者を苦しめました。彼は、アンティオコスをじっと見つめ、おまえは朽ちる者だと言って、そしりました。しかし、王の高ぶりをくじくことはできませんでした。王は、わずかな日のあいだの暴政を、大きな権力だと思っていたのです（第二マカバイ七・一五〜一六）。25:4 彼は、このような中にあっても、民族は神に『見捨てられて』いない、と言っていました。神は、アンティオコス『とその子孫』を、まもなく責めさいなもうとしておられる、と言うのです（第二マカバイ七・一六〜一七）。その後、六番目の者が、死の間際に言いました。「『思い違いをするな』。わたしたちは、自分の罪のために罰を受け、苦しみの中で清められるために、自ら進んで『これを受けている』のだ」（第二マカバイ七・一八）。25:5 また、彼は王に、『神と戦おうとくわだてながら、罰を免れると思ってはならない、と言いました（第二マカバイ七・一九）。ロゴスによって神とされた人々と戦う者こそ、神と戦う者だからです。

26:1 最後に、アンティオコスは末の子を手に捕らえました。この子も、あれほどの痛みを何とも思わなかった人々の兄弟であり、彼らと同じ志を持っている、と悟りました。そこで、ほかの手立てを用いたのです。勧めによって、また誓いによる保証によって、この子を説き伏せられると思ったのです。『父祖の掟から移る』なら、富ませて『幸いな者とし』、王の友の列に加え、王の『務め』を任せる、と誓って約束したのです（第二マカバイ七・二四）。26:2 しかし、何の効き目もありませんでした。若者は、言われることを自分の志とは無縁なものとして、少しも心に留めなかったのです。そこで、王は『母を呼び寄せて、少年が助かるように、相談相手になってやれと勧めた』のです（第二マカバイ七・二五）。26:3 母は、王の望むことについて、息子を説き伏せるかのように見せかけました。そして、暴君をあざけり、息子に忍耐について多くの言葉をかけました

（第二マカバイ七・二六～二九）。それで、若者は、迫り来る刑罰を待たずに、先んじて処刑する者たちを呼び出したのです。彼は、こう言いました。「何をためらい、ぐずぐずしているのか。26:4わたしたちは、神から与えられた律法に聞き従うのだ」（第二マカバイ七・三〇）。神の言葉に逆らう命令は、受け入れてはなりません。それだけでなく、彼は、王が自分の下で裁かれる者たちに判決を下すように、暴君に対する判決を下しました。裁かれる者というより、むしろ暴君を裁く者だったのです。彼は、暴君が天の子らに手を上げた以上、『すべてを見通す全能の神の裁き』を逃れることはない、と言いました（第二マカバイ七・三四～三五）。

27:1そのとき、これほど多くの子の母を見ることができました。母は、息子たちの苦しみと死を、『神への望みのゆえに』、『心強く』耐えていたのです（第二マカバイ七・二〇）。敬虔の露ときよさの風が、母の情の火を、その胸のうちに燃えつかせなかったからです。その火は、多くの母たちのうちでは、最も重い災いに会えば当然そうなるように、燃え上がるものです。27:2これらのことも、聖書からかいつまんで引いておきました。いま論じていることに、たいへん役立つと思うからです。それは、敬虔と神への愛が、どれほどの力を持っているかを、わたしたちが見るためです。最も厳しい苦しみと最も重い責め苦に立ち向かう力です。神への愛は、ほかのどんな愛よりも、はるかにまさる力を持っているのです。27:3この神への愛と、人間の弱さとは、同じ国に住むことができません。弱さは、魂の全体から国境の外へ追い出され、少しも働くことができなくなります。こう言うことのできる人がいるところでは、そうなのです。『主はわが力、わが歌』（詩篇一一八・一四）。『わたしを強くして下さるわたしたちの主キリスト・イエスによって、何事でもすることができる』（ピリピ四・一三、第一テモテ一・一二）。

28〜29章　救いの杯

28:1 殉教がどのようなものであり、神に対するどれほどの確信を生み出すものであるかは、次のことからも学ぶことができます。聖徒は、いわば誉れを重んじる人です。神から先に自分に与えられた恩恵に報いたいと願って、主から受けたすべてのことについて、主に何をしたらよいかを求めます。そして、善い志を持つ人が神に返すことのできるもので、いわば恩恵と釣り合うものは、殉教による死のほかに何も見いだしません。28:2 詩篇の第百十五篇に、問いの部分はこう書かれているからです。『主がわたしに報いてくださったすべてのことについて、わたしは主に何を報いようか』（詩篇一一六・一二）。そして、その問いに答える部分があります。「これを言う人は、主から受けたすべてのことについて、主に何を報いるのか」と問うた人への答えです。それは、こう言われています。『わたしは救の杯を受けて、主のみ名を呼ぶ』（詩篇一一六・一三）。28:3 『救の杯』とは、殉教を呼ぶ習わしの名です。福音書にそうあるのを、わたしたちは見いだします。イエスの御国で『右に』、また『左に』すわりたいと願った人々が、より大きな誉れを求めました（マタイ二〇・二一）。そのとき、主は彼らにこうおっしゃいました。『あなたがたは、わたしが飲む杯を飲むことができるか』（マルコ一〇・三八）。杯とおっしゃって、殉教のことを言っておられるのです。28:4 このことは、次の言葉からも明らかです。『父よ、もしできることでしたら、この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしの思いではなく、みこころのままになさってください』（マルコ一四・三六、マタイ二六・三九）。また、わたしたちは次のことも学びます。イエスがお飲みになったあの杯を飲む人は、王の王と共にすわり、共に王となり、共にさばくのです。28:5 ですから、これが『救の杯』です。これを受ける人は、『主のみ名を』呼ぶことになります。そして、『すべて主の名を呼ぶ者は救われる』のです（ヨエル二・三二、使徒二・二一、ローマ一〇・一三）。

29:1 しかし、聖書の意図を正確に捉えない人が、次の言葉を読んで、こう考えるかもしれません。救い主でさえ、受難の時に、いわばおじ恐れなさったのだ、と。その言葉とは、『父よ、もしできることでしたらどうか、この杯をわたしから過ぎ去らせてください』です（マタイ二六・三九）。そして、「あのかたがおじ恐れなさったのなら、だれがいつまでも気高くいられようか」と言う人もいるでしょう。29:2 まず、救い主についてこのように考える人々に、尋ねてみましょう。救い主は、次のように言った人よりも、劣っておられたのでしょうか。『主はわたしの光、わたしの救だ、わたしはだれを恐れよう。主はわたしの命のとりでだ。わたしはだれをおじ恐れよう。29:3 悪を行う者どもが、わたしの肉を食らおうとして近づいたとき、わたしを苦しめる者、わたしの敵は、みずから弱り果てて倒れた。たとい軍勢が陣営を張って、わたしを攻めても、わたしの心は恐れない。29:4 たといいくさが起って、わたしを攻めても、その中でわたしは望みをいだく』（詩篇二七・一〜三）。おそらく、預言者のうちで語られているこれらの言葉は、ほかのだれの言葉でもなく、救い主の言葉なのでしょう。救い主は、父から来る光と、父からの救いのゆえに、だれをもお恐れになりませんでした。また、神がとりでとなって守ってくださった、その守りのゆえに、だれをもおじ恐れなさらなかったのです。29:5 サタンの軍勢全体がこのかたを攻めて陣営を張ったときにも、このかたの心は少しも恐れませんでした。聖なる教えに満ちたその心は、いくさが起ってこのかたを攻めたときにも、神に望みをいだいていたのです。29:6 ですから、同じ人が、臆病から一方の言葉を言い、勇気からもう一方の言葉を言い切ることは、できません。一方は、『父よ、もしできることでしたらどうか、この杯をわたしから過ぎ去らせてください』です。もう一方は、『たとい軍勢が陣営を張って、わたしを攻めても、わたしの心は恐れない』です。この箇所で、わたしたちは何かを見落としているのではないでしょうか。三人の福音書記者がそろって杯に付けている、『この』という指示の語に、目を留めてくだ

さい。29:7 マタイは、主がこうおっしゃったと書いています。『父よ、もしできることでしたらどうか、この杯をわたしから過ぎ去らせてください』（マタイ二六・三九）。ルカは、こうです。『父よ、みこころならば、どうぞ、この杯をわたしから取りのけてください』（ルカ二二・四二）。マルコは、こうです。『アバ、父よ、あなたには、できないことはありません。どうか、この杯をわたしから取りのけてください』（マルコ一四・三六）。29:8 ですから、どんな理由で世を去ることになるにせよ、成し遂げられる殉教は、すべて杯と呼ばれます。そうであれば、あなたは次のように言うことができるかどうか、考えてみてください。『この杯をわたしから過ぎ去らせてください』とおっしゃった方は、殉教という類をお退けになったのではない（もしそうなら、「杯をわたしから過ぎ去らせてください」とおっしゃったはずだからです）。そうではなく、おそらく、この種類の殉教をお退けになったのだ、と。29:9 また、次のように考えることができるかどうか、注意してみてください。救い主は、杯の、いわば種類と、それぞれの杯によって起こるはずのことを見通しておられたのではないでしょうか。そして、このうえなく深い知恵によって、その違いを捉えておられたのではないでしょうか。そのうえで、殉教による世の去り方のうち、この種類のものをお退けになったのではないでしょうか。そして、おそらくもっと重い別のものを、ひそかに願っておられたのではないでしょうか。それは、いっそう広く、より多くの人に及ぶ恩恵が、別の杯を通して成し遂げられるためです。しかし、それが起こることは、まだ父のみこころではありませんでした。父は、子の願いよりも、救い主が見ておられたことよりも知恵深く、道筋と秩序に従って、物事を治めておられたのです。29:10 詩篇では、『救の杯』とは、明らかに殉教者たちの死のことです。そのため、『わたしは救の杯を受けて、主のみ名を呼ぶ』という言葉の後に、次の言葉が続いているのです。『主のきよい者たちの死はそのみ前において尊い』（詩篇一一六・一五）。29:11 ですから、神のきよい者であり、ふさわしくない者ではない者として、わたしたちに『尊い』『死』が訪れます。それは、いわばありふれた、神を敬うことには何の実りもない死を死ぬことによるのではありません。選ばれた死、すなわちキリスト教と敬虔ときよさのための死を死ぬことによるのです。

30〜33章　殉教の洗礼

30:1 また、わたしたちが犯してきた罪も、思い起こしましょう。そして、次のことも思い起こしましょう。洗礼によらなければ、罪のゆるしを受けることはできません。また、福音の掟によれば、罪のゆるしを得るために、水と霊とによってもう一度洗礼を受けることはできません。そして、わたしたちには、殉教の洗礼が与えられるのです。そう呼ばれていることは、次のことから明らかです。『あなたがたは、わたしが飲む杯を飲むことができるか』という言葉があります。その言葉に、『あるいは、わたしが受ける洗礼を受けることができるか』という言葉が続いているのです（マルコ一〇・三八）。また、ほかの箇所では、こう言われています。『しかし、わたしには受けねばならない洗礼がある。そして、それを受けてしまうまでは、わたしはどんなにか苦しい思いをすることであろう』（ルカ一二・五〇）。考えてみてください。救い主の洗礼は世のきよめとなりました。そのように、殉教による洗礼もまた、多くの人々をいやしてきよめるものとなるのではないでしょうか。30:2 というのも、モーセの律法による祭壇に奉仕していた人々がいました。彼らは、『やぎや雄牛の』血によって、当時の人々に罪のゆるしを取り次いでいると思われていました（ヘブル九・一三）。同じように、イエスのあかしのために『首を切られた人々』がいます（黙示録二〇・四）。その魂も、天にある祭壇のそばに、むなしく控えているのではありません。祈る人々に、罪のゆるしを取り次ぐのです。30:3 同時に、わたしたちは次のことも知っています。大祭司イエス・キリストは、ご自身を犠牲としてささげになりました。それと同じように、このかたを大祭司とする祭司たちも、自分自身を犠牲としてささげるのです。この犠牲のゆえに、彼らは、自分にふさわしい場所にいるように、祭壇のそばに姿を見せるのです。30:4 しかし、祭司たちのうち、自分もきずがなく、きずのない犠牲をささげる者は、神に仕えていました。一方、モーセがレビ記に書き記したきずを持つ者は、祭壇から遠ざけられていました。30:5 では、きずのない犠牲をささげる、きずのない祭司とは、だれのことでしょうか。告白を堅く守り、殉教の道理が数え上げて求めることを、すべて満たす人ではないでしょうか。このことについては、前に述べておきました。

31:1 殉教者たちのこれほど大きな幸いは、深い平和と凪と晴れた空のうちにあることになります。その幸いが、何か陰鬱に思われるものから始まらなければならないとしても、驚かないようにしましょう。こう呼んでよければ、冬の嵐のような空模様から始まるのです。31:2 というのも、まず、冬の嵐の中で狭く細い道を進まなければなりません。そして、幸いな人々がそれぞれ身につけた舵取りの腕を、示さなければならないのです。それは、その後に、雅歌で、冬の嵐を泳ぎ渡った花嫁に向かって言われている言葉が、実現するためです。こう言われています。『わが愛する者はわたしに答えて言う。立って、出てきなさい、わが近くにいる者よ、わが麗しき者よ、わが鳩よ。31:3 見よ、冬は過ぎ、雨もやんで、すでに去った』（雅歌二・一〇〜一一）。あなたがたも、さらに次のことを覚えていてください。いまの冬の嵐を、力強く、たゆまず闘い抜くほかに、『冬は過ぎ』という言葉を聞く道はありません。31:4 冬が過ぎ、雨もやんで、すでに去った後には、花があらわれるでしょう。『主の家に植えられた者は、われらの神の大庭に花を咲かせます』からです（詩篇九二・一三）。

32:1 また、わたしたちは次のことも知っています。わたしたちは、イエスに説き伏せられて、偶像と、多くの神々を拝む無神論とを捨てました。敵は、そのわたしたちを、偶像を拝むようにと説き伏せることはできません。しかし、力ずくで強いたいと思っているのです。そのため、敵は、力を得た相手に向けてこのようなことを行います。そして、試みられる人々を、殉教者とするか、偶像を拝む者とするか、どちらかにするのです。32:2 敵は、今もしばしば、こう言います。『もしあなたが、ひれ伏してわたしを拝するなら、これらのものを皆あなたにあげましょう』（マタイ四・九）。ですから、偶像を拝み、悪霊どもに自分を従わせることのないように、気をつけましょう。異邦人の偶像は、悪霊どもなのです。

32:3 なんということでしょう。負いやすい（クレーストス）キリスト（クリストス）のくびきと、その『軽い』『荷』を捨てるとは（マタイ一一・三〇）。再び悪霊どものくびきに自分を服させ、最も重い罪の荷を負うとは。しかも、わたしたちは、偶像に仕える者たちの『心は灰』であり、彼らの『生活は泥よりも卑しい』ことを知ったのです（知恵一五・一〇）。また、こう言いもしたのです。『われわれの先祖は、なんと偽りの偶像を手に入れたことか。それらのうちには、雨を降らせる者はいない』（エレミヤ一六・一九、一四・二二）。

33:1 ネブカデネザルが『金の像』を立てたのは、昔だけのことではありません（ダニエル三・一）。ハナニヤとアザリヤとミシャエルを脅したのも、その時だけのことではありません。もし拝さないなら、『火の燃える炉の中に』投げ込む、と脅したのです（ダニエル三・六）。今も、ネブカデネザルは、向こう岸へ渡る者であり、まことのヘブルびとであるわたしたちに、同じことを言っているのです。33:2 しかし、わたしたちは、あの聖なる人々にならいましょう。それは、あらゆる火をわたしたちから消し、わたしたちの魂の主導部分を冷やしてくれる、天の露を味わうためです。今も、ハマンが、モルデカイであるあなたがたに、自分を拝させようとすることがあるかもしれません。そのときには、あなたがたはこう言ってください。「わたしは、イスラエルの『神の栄光の上に人々の誉れを』置きはしない（エステル四・一七）[1]」。33:3 神の言葉によってベルを打ち倒し、ダニエルと共に竜を殺しましょう[2]。それは、わたしたちが獅子の口に近づいても、獅子から何の害も受けずにいられるためです。獅子たちは、わたしたちを呑みこむことはできません。そのとき、獅子たちに食い尽くされるのは、いまの闘いを引き起こした張本人たちだけでしょう。33:4 ヨブのりっぱな行いの中に、次の言葉も語られていることを、心に堅く留めておきましょう。『わたしが手を口に当てて口づけしたなら、これもまた、最大の不法としてわたしに数えられるがよい』（ヨブ三一・二七〜二八）。おそらく、わたしたちは、手を口に当てて口づけするよう命じられるでしょう。

訳注

1 エステル記のギリシア語訳にだけある部分の言葉。
2 ベルと竜の話は、ダニエル書のギリシア語訳にだけある。

34章　使徒たちに語られた殉教の言葉

34:1 また、次のことにも注意しましょう。救い主は、殉教についての預言を、群衆への言葉の中でではなく、使徒たちへの言葉の中で語っておられます。34:2 というのも、先に『イエスはこの十二人をつかわし、彼らに命じて言われた。異邦人の道に行くな』という言葉と、その続きが語られています（マタイ一〇・五）。その後に、次の言葉が加えられているのです。『人々に注意しなさい。彼らはあなたがたを衆議所に引き渡し、会堂でむち打つであろう。またあなたがたは、わたしのために長官たちや王たちの前に引き出されるであろう。それは、彼らと異邦人とに対してあかしをするためである。34:3 彼らがあなたがたを引き渡したとき、何をどう言おうかと心配しないがよい。言うべきことは、その時に授けられるからである。語る者は、あなたがたではなく、あなたがたの中にあって語る父の霊である。34:4 兄弟は兄弟を、父は子を殺すために渡し、また子は親に逆らって立ち、彼らを殺させるであろう。またあなたがたは、わたしの名のゆえにすべての人に憎まれるであろう。34:5 しかし、最後まで耐え忍ぶ者は救われる。一つの町で迫害されたなら、他の町へ逃げなさい。その町からも迫害されたなら、また別の町へ逃げなさい。よく言っておく。34:6 あなたがたがイスラエルの町々を回り終らないうちに、人の子は来るであろう』（マタイ一〇・一七～二三）。また、ルカも、同じようなことを書き記しています。『あなたがたが会堂や役人や高官の前へひっぱられて行った場合には、どう弁明しようか、何を言おうかと心配しないがよい。言うべきことは、聖霊がその時に教えてくださるからである』（ルカ一二・一一～一二）。また、ほかの言葉の後に、こうあります。『だから、どう答弁しようかと、考えておかないことに心を決めなさい。あなたがたの反対者のだれもが抗弁も否定もできないような言葉と知恵とを、わたしが授けるから。34:7 しかし、あなたがたは両親、兄弟、親族、友人にさえ裏切られるであろう。また、あなたがたの中で殺されるものもあろう。また、わたしの名のゆえにすべての人に憎まれるであろう。しかし、あなたがたの髪の毛一すじでも失われることはない。耐え忍ぶことによって、自分の魂をかち取りなさい』（ルカ二一・一四～一九）。また、マルコも、同じようなことを言っています。『人々があなたがたを連れて行って引きわたすとき、何を言おうかと、前もって心配したり、前もって考えたりするな。むしろ、その時に示されることを語るがよい。語る者はあなたがた自身ではなくて、聖霊である。34:8 また兄弟は兄弟を、父は子を殺すために渡し、子は両親に逆らって立ち、彼らを殺させるであろう。また、あなたがたはわたしの名のゆえに、すべての人に憎まれるであろう。しかし、最後まで耐え忍ぶ者は救われる』（マルコ一三・一一～一三）。マタイのもとにある次の言葉も、殉教へと勧めるものですが、ほかのだれでもない十二人に向けて語られています。わたしたちも、この言葉を聞かなければなりません。わたしたちは、聞くことによって、これを聞いた使徒たちの兄弟となり、使徒たちと共に数えられる者となるのです。34:9 その言葉は、次のとおりです。『からだを殺しても、魂を殺すことのできない者どもを恐れるな。むしろ、からだも魂も地獄で滅ぼす力のあるかたを恐れなさい』（マタイ一〇・二八）。34:10 そして、これに続けて、主はわたしたちに次のことを教えておられます。人が殉教の闘いに臨むのは、摂理なしにではありません。というのも、こう言われています。『二羽のすずめは一アサリオンで売られているではないか。34:11 しかも天にいます父の許しがなければ、その一羽も地に落ちることはない。またあなたがたの頭の毛は、みな数えられている。34:12 それだから、恐れることはない。あなたがたは多くのすずめよりも、まさった者である。だから人の前でわたしを告白する者を、わたしもまた、天にいますわたしの父の前で告白するであろう。しかし、人の前でわたしを否む者を、わたしも天にいますわたしの父の前で否むであろう』（マタイ一〇・二九～三三）。34:13 ルカのもとにある言葉も、これと同じ意味を持っています。『わたしの友であるあなたがたに、これらのことを言う。からだを殺しても、そのあとでそれ以上なにもできない者どもを恐れるな。34:14 恐るべき者がだ

れであるか、教えてあげよう。殺したあとで、更に地獄に投げ込む権威のあるかたを恐れなさい。そうだ、あなたがたに言っておくが、そのかたを恐れなさい。五羽のすずめは二アサリオンで売られているではないか。34:15 しかも、その一羽も神のみまえで忘れられてはいない。その上、あなたがたの頭の毛までも、みな数えられている。それだから、恐れることはない。あなたがたは多くのすずめよりも、まさった者である。34:16 そこで、あなたがたに言う。だれでも人の前でわたしを告白する者を、人の子も神の使たちの前で告白するであろう。しかし、人の前でわたしを否む者は、神の使たちの前で否まれるであろう』（ルカ一二・四～九）。また、ほかの箇所には、こうあります。『わたしとわたしの言葉とを恥じる者に対しては、人の子もまた、自分の栄光と、父と聖なる御使との栄光のうちに現れて来るとき、その者を恥じるであろう』（ルカ九・二六）。マルコも、これによく似た言葉を書き記しています。『邪悪で罪深い時代にあって、わたしとわたしの言葉とを恥じる者に対しては、人の子もまた、父の栄光のうちに聖なる御使たちと共に来るときに、その者を恥じるであろう』（マルコ八・三八）。ですから、わたしたちを殺す者たちが殺すのは、からだのいのちです。というのも、『からだを殺す者どもを恐れるな』という言葉は、そういう意味だからです。マタイとルカは、この言葉をまったく同じ文言で語っています。34:17 そして、からだを殺した後には、たとえ望んでも、彼らは『魂を殺す』ことができません。それどころか、『それ以上なにも』できないのです。というのも、告白そのものによって生かされた魂が、どうして殺されることがあるでしょうか。34:18 イザヤ書でわたしたちを殉教へとお勧めになる方と、そのしもべとが、その魂のために、あかしを返してくださるのです。こう書かれているところです。『わたしの証人となれ。わたしも証人である、と主なる神は言われる。わたしが選んだしもべも、証人である』（イザヤ四三・一〇）[1]。また、次のことにも目を留めてください。次の戒めは、イエスの僕たちにではなく、その『友』に与えられています。『からだを殺しても、そのあとでそれ以上なにもできない者どもを恐れるな』。ですから、恐れるべきなのは、『からだも魂も地獄で滅ぼす力のあるかた』です。というのも、このかただけが、『殺したあとで』、『地獄に投げ込む権威』を持っておられるからです。そして、このかたは、『からだを殺す者ども』を恐れた人々を、地獄に投げ込みなさるのです。その人々は、『からだも魂も地獄で滅ぼす力のあるかた』を恐れませんでした。『殺したあとで、更に地獄に投げ込む権威のあるかた』も、恐れなかったのです。34:19 ほかのだれかの『頭の毛』が『数えられている』のなら、イエスのために首を切られる人々の頭の毛も、明らかに数えられています。それなら、わたしたちは、人々と、神でもない者たちとの前で、神の子を告白しましょう。それは、わたしたちが告白したその方が、わたしたちに報いてくださるためです。ご自分の父なる神の前でわたしたちを告白し、地上でご自分を告白した者を、天でご自身が告白して、報いてくださるためです。

訳注

1 イザヤ書のギリシア語訳の句。ヘブル語からの訳には『わたしも証人』がない。

35〜37章　天での告白、パラダイスへの道、魂を憎むこと

35:1 このようなことを考え合わせる人がいるとします。その人が、使徒のあの言葉を口にしないことがあるでしょうか。『今のこの時の苦しみは、やがてわたしたちに現されようとする栄光に比べると、言うに足りない』（ローマ八・一八）。というのも、父の前での告白は、人の前での告白よりも、はるかに大きいではありませんか。35:2 殉教者たちは、地上で神の子を告白します。そして、殉教者たちが告白したその方は、天で告白してくださいます。この天での告白は、地上での告白よりも、比べものにならないほどまさっているではありませんか。『人の前で』否もうと考える人は、偽りなくお語りになった方の言葉を思い起こすべきです。『わたしも天にいますわたしの父の前で否むであろう』（マタイ一〇・三三）。さて、マタイは、『わたしもまた、天にいますわたしの父の前で告白するであろう』と書き記しました（マタイ一〇・三二）。一方、ルカは、『人の子も神の使たちの前で告白するであろう』と書き記しました（ルカ一二・八）。そこで、わたしは考えます。『すべての造られたものの長子』であり、『見えない神のかたち』である方がおられます（コロサイ一・一五）。このかたは、ご自分を告白した者を、天にいます父の前で告白なさるのではないでしょうか。一方、『肉によればダビデの子孫から』お生まれになった方がおられます（ローマ一・三）。このかたは、そのために『人の子』なのです。また、女からお生まれになり、その女も人であって、そのために『人の子』と呼ばれます。イエスにおける人間とは、このかたのことと解されます。このかたは、ご自分を告白した人々を、『神の使たちの前で』告白なさるのではないでしょうか。否んだ者たちについても、これに見合う説明をしなければなりません。35:3 さらに、次のことも考えておかなければなりません。『人の前で』御子を告白する者は、自分にできるかぎり、キリスト教とこのキリスト教の父とを推薦します。告白するその人々の前で、推薦するのです。一方、すべての造られたものの長子と人の子とに告白される者がいます。その者は、神の子と人の子の告白によって、天にいます父と神の使たちとに推薦される、ということです。35:4 『自分で自分を推薦する人ではなく、主に推薦される人こそ、確かな人なのである』とあります（第二コリント一〇・一八）。そうであれば、天にいます父と神の使たちとに推薦されるにふさわしい、と判断された人がいます。その人を、どうして確かな人と考えずにいられるでしょうか。35:5 この人と、この人に似た人々が、確かな人であるとします。主は、責め苦と取り調べによって、この人々を『炉の中の金のように』『試し』なさいました。そして、『全焼のいけにえのように受けいれ』てくださいました（知恵三・六）。それなら、試みの炉の中で本性を暴かれ、否んだ者たちについては、何と言わなければならないでしょうか。否まれるにふさわしい者を否みなさる方が、この者たちを確かでない者として否みなさるのです。天にいます父の前で、また『神の使たちの前で』否みなさるのです（ルカ一二・九）。

36:1 わたしたちは、否まないために闘わなければならないだけではありません。神とかかわりのない人々には、わたしたちが恥ずべき目にあっていると思われます。それでも、そもそも恥じることのないように、闘わなければならないのです。とくに、聖なるアンブロシオスよ、あなたはそうしなければなりません。実に多くの町々で誉れを受け、迎えられてきたあなたが、いまイエスの十字架を負うて、いわば晴れの行列を進んでいるならです。そして、イエスに従っているならです。イエスは、あなたを『長官たちや王たちの前に』お連れになるのです（マタイ一〇・一八）。それは、イエスご自身があなたと共に歩んでくださり、ご自身があなたに言葉と知恵とを授けてくださるためです。また、そのかたと共に闘うあなた、プロトクテトスにも、授けてくださるためです。そして、共に殉教するあなたがたに、授けてくださるためです。あなたがたは、『キリストの苦しみの『なお足りないところ』を補っているのです（コロサイ一・二四）。さらに、イエスがあなたがたと共に神のパラダイスへ行ってくださるためです。そこには、『ケルビムと、回って、いのちの木の道を守っている炎のつるぎ』があ

ります（創世記三・二四）。そのあいだを、どのようにして通り抜けることができるかを、あなたがたに示してくださるためです。36:2 というのも、この二つは、たしかに『いのちの木の道を』守っています。しかし、守っているのは、ふさわしくない者がだれも、その道を通っていのちの木のもとに行くことを許されないためなのです。36:3 すなわち、すえられている土台はイエス・キリストです。炎のつるぎは、その上に、『木、草、または、わら』を建てた者たちを捕らえます（第一コリント三・一一～一二）。そして、もっとも燃えやすく、もっとも長く燃える木、こう名づけてよければ、否むことの木を建てた者たちを捕らえるのです。一方、ケルビムは、炎のつるぎに捕らえられることのない者たちを迎え入れます。この者たちは、炎のつるぎと同じたぐいのものを何も建てなかったので、捕らえられないのです。ケルビムは、この者たちを『いのちの木』のもとへ送り届けます。また、東の方に『神が植え』、『地から』『はえさせた』すべてのもののもとへ送り届けるのです（創世記二・八～九）。36:4 イエスがあなたがたと共にパラダイスへの道を歩んでくださるのですから、蛇を見くだしてください。蛇は、すでに打ち負かされ、イエスの足の下に踏み砕かれています。そして、イエスによって、あなたがたの足の下にも踏み砕かれているのです。イエスは、『あなたがたに、へびやさそりを踏みつけ、敵のあらゆる力に打ち勝つ権威を』授けてくださいました。『それらのどれも、あなたがたに害をおよぼすことがないためである』（ルカ一〇・一九）。

37:1 ですから、神の子を否んではなりません。神の子も、その身内の者たちも、その言葉も、恥じてはなりません。むしろ、次の言葉に聞かなければなりません。『しかし、人の前でわたしを否む者を、わたしも天にいますわたしの父の前で否むであろう』。また、次の言葉にも聞かなければなりません。『わたしとわたしの者たちとを恥じる者に対しては、人の子もまた、自分の栄光と、父と聖なる御使との栄光のうちに現れて来るとき、その者を恥じるであろう』（ルカ九・二六）[1]。さらに、次の言葉にも聞かなければなりません。『邪悪で罪深い時代にあって、わたしとわたしの言葉とを恥じる者に対しては、人の子もまた、父の栄光のうちに聖なる御使たちと共に来るときに、その者を恥じるであろう』（マルコ八・三八）。37:2 イエスご自身も、かつて、『恥をもいとわないで十字架を忍び』（ヘブル一二・二）、そのために神の『右に座し』ておられます（ヘブル一〇・一二）。イエスにならう者たちも、恥をもいとわず、このかたと共にすわり、天でこのかたと共に支配することになります。このかたは、『地上に平和を』もたらすためではなく、ご自分の弟子たちの魂に平和をもたらすためにおいでになりました。そして、『地上に』『つるぎを』投げ込むためにおいでになったのです（マタイ一〇・三四）。37:3 というのも、『神の言は生きていて、力があり、もろ刃のつるぎよりも鋭くて、魂と霊と、関節と骨髄とを切り離すまでに刺しとおして、心の思いと志とを見分けることができる』のです（ヘブル四・一二）。それで、このかたこそ、とくにいま、わたしたちの魂に平和を賞として与えてくださいます。その平和は、すべての知性にまさるもので、このかたがご自分の使徒たちにお残しになったものです。一方、このかたは、土に属する者のかたちと天に属する者のかたちとの間に、つるぎを投げ込みなさいました。それは、いまは、わたしたちのうちの天に属する者を受け取ってくださるためです。そして、のちに、二つに断たれずにすむにふさわしい者となったわたしたちを、まるごと天に属する者としてくださるためです。37:4 また、このかたは、『地上に』『つるぎ』だけでなく、『火』をも投げ込むためにおいでになりました。この火について、こう言っておられます。『すでに燃えていたならと、わたしは願っている』（ルカ一二・四九）。ですから、この火が、あなたがたのうちでも燃えますように。そして、あなたがたの地上的な思い、体を愛する思いを、すべて消し去りますように。また、イエスが『それを受けてしまうまでは』苦しい思いをなさった、あの洗礼を、いま、心から進んで受けてください（ルカ一二・五〇）。37:5 そして、『妻、子、兄弟、姉妹』のあるあなたは、次の言葉を覚えていてください。『だれでもわたしのもとに来て、父、母、妻、子、兄弟、姉妹を憎まないなら、わたしの弟子となることはできない』（ルカ一四・二六）。また、あなたがた二人は、次の言葉を覚えていてください。『だれでもわたしのもとに来て』、先のものに加えて『さらに自分の魂までも』『憎まないなら、わたしの弟子となることはできない』。37:6 しかし、自分の魂を憎むときは、憎むことによって、それを保って『永遠のいのちに』至らせるように、憎んでください。というのも、主はこう言っておられます。『この世で自分の魂を憎む者は、それを保って永遠の

いのちに至る』（ヨハネ一二・二五）。ですから、永遠のいのちのために魂を憎んでください。イエスが憎むようにと教えておられるのは、良い、益のある憎しみだ、と信じてください。37:7 わたしたちは、魂が保たれて『永遠のいのちに』至るために、魂を憎まなければなりません。それと同じように、それらを持つあなたは、『妻、子、兄弟、姉妹』を憎んでください。それは、憎んだことそのものによって神の友となり、彼らに恩恵を施す大胆さを得て、憎まれる者たちに益を与えるためです。

訳注

1 ルカ福音書の本文では『わたしの言葉』。

38〜40章　残される子供たち、世を愛さないこと、悪霊の食卓

38:1 また同時に、霊によって祈った人のことも思い起こしてください。殉教者たちは、神への愛のゆえに、子供たちを後に残します。その人は、その子供たちのために祈り、こう言いました。『殺された者たちの子らを守りながらえさせてください』（詩篇七九・一一）[1]。38:2 ただ、次のことを知っておいてください。『肉の子がそのまま神の子なのではない』ということです（ローマ九・八）。また、次のことも知っておいてください。アブラハムの子孫である者たちには、二つの言葉が言われています。『わたしは、あなたがたがアブラハムの子孫であることを知っている』（ヨハネ八・三七）。『もしアブラハムの子であったなら、アブラハムのわざをしたであろう』（ヨハネ八・三九）。それと同じように、あなたの子供たちにも、こう言われることになります。「わたしは、あなたがたがアンブロシオスの子孫であることを知っている」。また、「もしアンブロシオスの子であるなら、アンブロシオスのわざをするがよい」。38:3 そして、おそらく彼らはそうするでしょう。あなたがこのような仕方で世を去ったあと、あなたは、彼らのもとにとどまった場合よりも、多くの益を彼らに与えるからです。というのも、そのときには、あなたは彼らを、もっとよく知ったうえで愛し、もっと賢く彼らのために祈るでしょう。彼らがあなたの子であって、ただ子孫であるだけではないと知るならです。38:4 今は、次の言葉を口にしていてください。『わたしよりもむすこや娘を愛する者は、わたしにふさわしくない』（マタイ一〇・三七）。また、『自分の魂を得ている者はそれを失い、わたしのために自分の魂を失っている者は、それを得るであろう』（マタイ一〇・三九）。

39:1 殉教への熱意によって、あなたがたの父の霊に場所を与えてください。その霊は、神を敬うことのゆえに引き渡された人々に、お語りになります。自分たちが憎まれ、忌まわしい者、不敬虔な者と思われていることを知ったなら、そのときには、次の言葉を取り上げてください。『だから、この世はあなたがたを憎むのである』。『あなたがたはこの世のものではないからである』。『もしあなたがたがこの世から出たものであったなら、この世は、あなたがたを自分のものとして愛したであろう』（ヨハネ一五・一九）。39:2 あなたがたは、信じたときから、キリストのために多くのそしりと多くの危険を耐え忍んできました。最後まで、耐え忍ぶことにおいて進んでください。『最後まで耐え忍ぶ者は救われる』からです（マタイ一〇・二二）。次のことを知っておいてください。ペテロの言うとおり、あなたがたは大いに喜ぶことになります。『今しばらくのあいだは、さまざまな試みで悲しまねばならないかも知れない。それは、あなたがたの信仰の試されたものが、イエス・キリストの現れるとき、さんびと栄光とほまれとに至るためである。火で試されても朽ちる外はない金よりも、はるかに尊いものと見いだされるためである』（第一ペテロ一・六〜七）。39:3 ただし、『悲しまねば』とあるのは、苦しむという意味に聞いてください。それは、『あなたは悲しみのうちに子を産む』という言葉からも明らかです（創世記三・一六）。というのも、女は、必ずしも情念としての悲しみのうちに子を産むのではなく、苦しみのうちに産むのです。39:4 キリストの弟子たちに、次の言葉が役に立つとします。『世と世にあるものとを、愛してはいけない。もし、世を愛する者があれば、父の愛は彼のうちにない。すべて世にあるもの、すなわち、肉の欲、目の欲、持ち物の誇は、父から出たものではなく、世から出たものである。39:5 世と欲とは過ぎ去る』（第一ヨハネ二・一五〜一七）。それなら、過ぎ去るものを愛してはなりません。むしろ、神のみこころを行って、御子と父と聖霊と共に一つとなるにふさわしい者となってください。救い主の祈りに従ってです。救い主は、わたしとあなたとが一つであるように、39:6 『彼らもわたしたちのうちで一つとなるため』と言って、お祈りになりました（ヨハネ一七・二一）。『世』や『世にあるもの』を愛する人がいるとします。その人は、自分の魂を損し、あるいは失います。そして、良心を持ち歩きます。その良心は、『重荷』よりも重くなり（詩篇三八・四）、否むことによって倒れたことで重くなっています。そのような人が、いっ

たいどれほどの日数をもうけることができるでしょうか。39:7 わたしたちは、めいめい、ありふれた死で死ぬ危険に何度あったかを、思い起こしましょう。そして、考えてみましょう。わたしたちが守られてきたのは、自分の血で洗礼を受け、すべての罪を洗い落とすためではないでしょうか。そして、天にある祭壇のかたわらで、共に闘った人々と共に日々を過ごすためではないでしょうか。

40:1 しかし、ある人が屈してしまうとします。それは、命への強い愛着のためかもしれません。苦しみに対する弱さのためかもしれません。あるいは、わたしたちを悪いほうへ説き伏せようとする者たちが持ち出す、もっともらしいと思われる事柄のためかもしれません。そして、唯一の神とそのキリストとがおられることを否み、悪霊どもや運命の神々を告白するとします。そのような人は、次のことを知るべきです。自分は、『悪霊に食卓を』整え、『運命の神に混ぜ合わせた酒を』満たしているのです。主を捨て、その聖なる山を忘れているのです。そして、次の責めを受けることになります。イザヤは、それをこのように書き記しました。『しかし、わたしを捨て、わが聖なる山を忘れ、悪霊に食卓を整え、運命の神に混ぜ合わせた酒を満たすあなたがたよ。わたしは、あなたがたをつるぎに渡す。あなたがたは皆、ほふられて倒れる。あなたがたは、わたしが呼んだときに答えず、わたしが語ったときに聞かなかったからだ。そして、わたしの前に悪い事をおこない、わたしの好まなかった事を選んだからだ。40:2 それゆえ、主なる主はこう言われる。見よ、わがしもべたちは食べる、しかし、あなたがたは飢える。見よ、わがしもべたちは飲む、しかし、あなたがたはかわく。見よ、わがしもべたちは喜ぶ、しかし、あなたがたは恥じる。見よ、わがしもべたちは楽しみのうちに喜び踊る、しかし、あなたがたは心の苦しみによって叫ぶ。霊の砕かれたことによって泣き叫ぶ。40:3 あなたがたは、わたしの名を、わが選んだ者たちに残して、彼らを飽き足らせるからである。主はあなたがたを殺される』（イザヤ六五・一一～一五）[2]。さらに、主の食卓とは何かを悟り、本当にそれにあずかりたいと願うなら、次の言葉を知っておきましょう。『主の食卓と悪霊どもの食卓とに、同時にあずかることはできない』（第一コリント一〇・二一）。40:4 また、次の言葉があります。『わたしは今後決して、このぶどうの実から造ったものを飲むことをしない。天国でそれを新しく飲むその日までは』（マタイ二六・二九）。この言葉が何を意味するかを悟り、イエスと共に飲む人々の中に見いだされたいと願うなら、次の言葉に心を留めましょう。『主の杯と悪霊どもの杯とを、同時に飲むことはできない』（第一コリント一〇・二一）。40:5 雷の子ヨハネは、こう言っています。『父と御子とを否む者、御子を否む者はだれでも、父を持たない。御子を告白する者は、また父をも持つのである』（第一ヨハネ二・二二～二三）。これを聞いて、キリスト者ではないと言うことによって御子を否むことを、恐れない人がいるでしょうか。否むなら、その人は父を持たないことになるのです。40:6 また、父をも持つために、行いと言葉によってキリスト者であることを告白しようと、促されない人がいるでしょうか。というのも、告白する者たちは、父を持つのです。

訳注

1 詩篇のギリシア語訳の句。ヘブル語からの訳では『死に定められた者』。
2 イザヤ書のギリシア語訳の句。ヘブル語からの訳とは文言が違う。

41〜46章　苦難にあずかる者の慰め、犠牲と名についての余談

41:1 わたしたちは、不信仰から信仰に移ったことによって、『死からいのちへ』移ってきたとします（第一ヨハネ三・一四）。そうであれば、世がわたしたちを憎んでも、驚かないようにしましょう。というのも、『死からいのちへ』移らずに、死のうちにとどまっている者は、だれも、移ってきた人々を愛せないからです。その人々は、死の、こう名づけてよければ、暗い家から、生ける石で造られ、いのちの光に満ちた建物へと移ってきたのです。41:2 イエスは、『わたしたちのためにいのちを捨てて下さった』のです（第一ヨハネ三・一六）。それなら、わたしたちも、いのちを捨てましょう。このかたのために、とは言いません。自分たちのためにです。また、思うに、わたしたちの殉教によって築き上げられる人々のためにもです。41:3 わたしたちキリスト者に、誇りの時が来ました。こう言われているからです。『それだけではなく、患難をも誇っている。なぜなら、患難は忍耐を生み出し、忍耐は錬達を生み出し、錬達は希望を生み出すことを、知っているからである。そして、希望は失望に終ることはない』（ローマ五・三〜五）。ただ、『神の愛が』『聖霊によって、わたしたちの心に』注がれていますように。41:4 パウロには、『もし、わたしが人間の考えによってエペソで獣と戦ったとすれば』と言わせておきましょう（第一コリント一五・三二）。わたしたちは、「『もし、わたしが人間の考えによって』ゲルマニアで殺されたとすれば」と言いましょう。

42:1 『キリストの苦難が満ちあふれているように』、『慰めもまた、キリストによって満ちあふれている』とします（第二コリント一・五）。そうであれば、キリストの苦難を、心から進んで受けいれましょう。そして、それがわたしたちのうちに満ちあふれるようにしましょう。わたしたちが、満ちあふれる慰めを求めているのならです。『悲しんでいる人たち』はみな、この慰めで『慰められる』でしょう（マタイ五・四）。しかし、おそらく、等しくではありません。42:2 というのも、もし慰めが等しいものであったなら、次のようには書かれなかったでしょう。『キリストの苦難がわたしたちに満ちあふれているように、わたしたちの受ける慰めもまた満ちあふれている』。苦難にあずかる者たちは、キリストと共にあずかっている苦難の割合に応じて、慰めにもあずかる者となるのです。あなたがたは、このことを、このようなことを確信をもって語る人からも学んでいます。わたしたちは、『あなたがたが苦難にあずかっているように、慰めにもあずかっている』ことを知っているからです（第二コリント一・七）。また、神は預言者を通して、こう言われます。『わたしは恵みの時に、あなたに答え、救の日にあなたを助けた』（イザヤ四九・八、第二コリント六・二）。わたしたちは今、キリストにあって神への敬虔のゆえに、見張られながら世の中を行列を組んで進み、引かれて行きます。それも、凱旋の行列に引き回されるのではなく、むしろ凱旋しながらです。それなら、このときのほかに、どのような恵みの時があるでしょうか。42:3 というのも、キリストにある殉教者たちは、キリストと共に『もろもろの支配と権威との』武装を解除し、共に凱旋するからです（コロサイ二・一五）。殉教者たちは、キリストの苦難にあずかる者となります。それと同じように、キリストが苦難の中でお立てになった勇ましいわざにも、あずかる者となるのです。そのわざの一つが、『もろもろの支配と権威とを』凱旋の行列に引き回すことです。あなたがたは、まもなく、それらが打ち負かされ、恥を受けるのを見るでしょう。42:4 わたしたちがこのようにしてここから解き放たれる日ほど、救の日と言える日が、ほかにあるでしょうか。ですが、わたしは勧めます。『どんな事にも、人につまずきを』与えてはなりません。あなたがたによって、長老の職や、執事の『務がそしりを招かないため』です。『かえって、あらゆる場合に、神の僕として、自分を』あらわしなさい（第二コリント六・三〜四）。『多くの忍耐にも』です。そのときには、こう言ってください。『今、わたしの忍耐とは何でしょう。42:5 主ではありませんか』（詩篇三九・七）。『患難にも』です。『正しい者には患難が多い』と信じてください（詩篇三四・一九）。

『危機（アナンカイ）にも』です。至福を、わたしたちに欠かせないもの（アナンカイア）として求めるためです。『行き詰まり（ステノコーリアイ）にも』です。狭く（ステネー）細い道を、それることなく歩み通して、いのちにたどり着くためです。42:6 必要であれば、『むち打たれることにも、入獄にも、騒乱にも、労苦にも、徹夜にも、飢餓にも』、自分をあらわしましょう（第二コリント六・五）。というのも、見よ、主がおられます。『その報いは』その手にあり、その人の行いに応じて『それぞれに報いる』ためのものです（イザヤ四〇・一〇、黙示録二二・一二）。

43:1 今、次のことを示しましょう。わたしたちが知識を慕い求めたのは、知識にふさわしい行いのためだったのです。どのような罪のどのような汚れからも離れた、すべての清さが、わたしたちのうちに現れますように。寛容な神の子として、寛容なキリストの兄弟として、起るすべてのことにおいて寛容でいましょう。『寛容な人は大いなる悟りがあり、気の小さい者はひどく愚かである』からです（箴言一四・二九）。『左右に持っている義の武器により』、自分をあらわさなければならないとします（第二コリント六・七）。わたしたちは、『誉れによって』自分をあらわしても、それに思い上がりはしませんでした（第二コリント六・八）。そうであれば、今は、辱めをも耐え忍びましょう。また、好評に値する生き方をして、好評を博したのなら、今は、不敬虔な者たちからの悪評にも耐えましょう。43:2 さらに、真理を愛する人々のもとで、真実な者として感嘆されたとします。そうであれば今は、わたしたちが迷っていると言われても、笑いましょう。わたしたちは、多くの危険から救い出されました。そのことで、多くの人が、わたしたちは神に認められていると言いました。今は、言いたい者には、わたしたちが知られていないと言わせておきましょう。そのときこそ、おそらく、わたしたちはもっと認められているのです。43:3 ですから、起ることを耐えながら、わたしたちは、懲らしめられてはいても、殺されはしません。また、喜んでいる者でありながら、悲しんでいる者のようになっています。

44:1 パウロは、どこかで、初めに耐え忍んだ人々に向かって、こう言っています。そして、前の忍耐に見合うように、みことばのための二度目の危険にも耐えるようにと、彼らを励ましています。『あなたがたは、光に照されたのち、苦しい大きな戦いによく耐えた初めのころのことを、思い出してほしい。そしられ苦しめられて見せ物にされたこともあれば、このようなめに会った人々の仲間にされたこともあった。44:2 さらにわたしの縄目を思いやり[1]、また、もっとまさった永遠の財産を持っていることを知って、自分の財産が奪われても喜んでそれを忍んだ。だから、あなたがたは自分の持っている確信を放棄してはいけない。その確信には大きな報いが伴っているのである。44:3 あなたがたに必要なのは、忍耐である』（ヘブル一〇・三二〜三六）。ですから、わたしたちも今、『苦しい大きな戦い』に耐え忍びましょう。『そしられ苦しめられて』も、『見せ物にされ』ても、わたしたちの『財産が奪われ』ることを『喜んで』受けいれながらです。というのも、わたしたちは、『もっとまさった財産』を持っていると信じているからです。それは、地上のものではなく、体のあるものでもなく、見えない、体のない財産です。44:4 というのも、わたしたちは、『見えるもの』に目を注ぐのではないからです。見えるものは『一時的』であり、あちらのものは『永遠』であると、わたしたちは見ているのです（第二コリント四・一八）。

45:1 ところで、ある人々は、悪霊どもについての教えを見て取っていません。その教えによれば、悪霊どもは、この濃い、地をめぐる空気の中にとどまるために、立ちのぼる煙による糧を必要とします。それで、焼き肉の煙と血と乳香がいつもある所を見張っているのです。それを見て取らずに、彼らは、犠牲をささげることを、どうでもよいこととして軽んじています。これに対しても、次のように言うことができるでしょう。盗賊や人殺しや、大王の敵である蛮族に糧を与える者は、公の益を損なった者として、罰をも受けます。そうであれば、悪の手下どもに、犠牲をささげて糧を与える者たちは、どれほどいっそう正当に責められることでしょうか。その糧が、彼らを地をめぐる所に引き留めているのです。とりわけ、次の言葉を学んでいながら、地上の悪の原因どもに犠牲をささげるなら、なおさらです。『主のほか、他の神々に犠牲をささげる者は、断ち滅ぼされなければならない』（出エジプト二二・二〇）。45:2 そして、わたしは思います。悪霊どもは、人々に逆らって働き、罪を犯します。その罪については、犠牲によって悪霊どもを養った人々も責められるでしょう。悪事を働いた悪霊ども自身に劣らずです。というのも、悪霊どもと、地上に彼らを引き留めた人々とが、い

わば一緒になって、人々に悪を行ったことになるからです。悪霊どもは、立ちのぼる煙や、自分たちの体にふさわしいと思われている糧がなければ、もちこたえられなかったはずなのです。

46:1 また、ある人々は、名は人の定めによるもので、名が指すものに対して、本性上のつながりを何も持たない、と考えています。そこで、こう思うのです。ある人が「わたしは第一の神を、あるいはゼウスを、あるいはゼーンを、あがめる」と言っても、違いはない。また、ある人が「わたしは太陽を、あるいはアポロンを敬い、受けいれる」と言っても、違いはない。月とアルテミス、地にある霊とデメテルでも、ギリシア人の知者たちが言うそのほかの名でも、同じだ、と。46:2 そのような人々には、次のように言わなければなりません。名についても、きわめて深い、奥に隠れた学問があります。それを悟る人は、次のことを見て取るでしょう。もし名が人の定めによるものであったなら、呼び出される悪霊どもや、わたしたちに見えないほかの力は、従わなかったでしょう。心ではあの者たちを思い描きながら、名を、人が定めたものとして口にする人々にです。ところが実際には、ある音声や音節が、呼び出される者たちを引き寄せます。息の音を伴うか伴わないか、音を長く伸ばすか短く縮めるかによって唱えられる呼び名も、そうです。それは、おそらく、わたしたちには見て取れないある本性によるのです。46:3 もしそうであって、名が人の定めによるものでないなら、第一の神を、ほかのどんな名でも呼んではなりません。呼んでよいのは、しもべモーセと預言者たちが用い、わたしたちの救い主であり主である方ご自身も用いておられる名だけです。たとえば、サバオト、アドナイ、サッダイです。また、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神です。『これは永遠の名、世々の呼び名である』と言われているからです（出エジプト三・一五）。悪霊どもが、自分たちの呼び名を第一の神に移しても、驚くにはあたりません。第一の神として拝されるためです。46:4 このようなことは、わたしたちのしもべモーセにも、預言者たちにも、父祖から伝わったならわしではありません。律法の完成であるキリストにも、その使徒たちにもそうです。わたしたちは、このことを、やむをえず書き添えておきました。だれかが、わたしたちを言いくるめたり、わずかでもわたしたちの考えを汚したりすることのないためです。わたしたちは、これらのことに注意深く心を留め、敵対する者たちに、つけ入るすきを少しも与えないようにしなければなりません。

訳注

1 ヘブル書には『獄に入れられた人々を』と読む本文もある。

47〜51章　岩の上の家と良い地、殉教者の血、結び

47:1 また、人は、理性ある魂の本質について、それが神と同族の何かを持っているという確信を得ていても、なお命を惜しみます。魂と神とは、どちらも知性的なもので、目に見えず、また、有力な論が証明するとおり、体を持たないのです。47:2 理性あるものたちが本性によって慕い求めるものは、捉えることも、届くこともできないものだったとします。それなら、わたしたちをお造りになった方は、なぜ、わたしたちのうちに慕う思いを植えつけなさったのでしょうか。ご自分への敬虔と、ご自分との交わりを慕う思いです。この慕う思いは、道を誤った人々のうちにさえ、神の意図のある跡を保っているのです。47:3 そして、次のことは明らかです。わたしたちの肢体はそれぞれ、何かに対して親しい結びつきを保つように生まれついています。目は見えるものに、耳は聞こえるものに対してです。それと同じように、知性は、知性で捉えられるものと、知性で捉えられるものを超えた神とに対して、そうなのです。47:4 『朽ちる体』は、わたしたちを妨げ、魂を重くし、『地上の幕屋』であって、『思い煩う知性を』圧しています（知恵九・一五）。それなら、わたしたちは、なぜためらい、迷っているのでしょうか。その体を脱ぎ捨て、縄目から解き放たれて、肉と血とともにある波を離れ、船出することをです。47:5 そのように船出するのは、キリスト・イエスと共に、至福にふさわしい休みを休むためです。そのとき、わたしたちは、万物を貫いて生きている同じロゴスを、まるごと見つめ、このかたから養われます。このかたのうちにある、きわめて多種多様な知恵を悟り、真理そのものによって形づくられます。そして、知識の、まことの、絶えることのない光に、知性を照らされます。その光によって見られるように生まれついているものを、眺めるためです。それらは、主の戒めによって明らかにされた目で見られるものです。

48:1 わたしたちは、ずっと前からイエスの言葉を聞いてきました。もう長いあいだ、福音の弟子とされてきました。そして、みな、自分のために家を建てました。では、どこに建てたのでしょうか。地を深く掘り下げて『岩の上に』建てたのか、それとも『土台なしで』、『砂の上に』建てたのか（マタイ七・二四〜二六、ルカ六・四八〜四九）。それは、今の闘いが示すでしょう。48:2 というのも、冬の嵐が来ているからです。それは、雨と激流と風を、あるいは、ルカの名づけ方では洪水を運んできます。それらが家に打ちつけたとき、どちらかになるでしょう。一つは、『それを揺り動かす』ことができない場合です。そのとき、家は倒れません。『岩の上に』、すなわちキリストの上に、土台をすえているからです。もう一つは、建物のもろさをあらわにする場合です。建物は、今来ている事態のために崩れ落ちるのです。48:3 わたしたちの建物には、そのようなことが起りませんように。というのも、否むことによる倒れ方は、まことにひどいからです。ルカの言い方では、土台なしの建物の『被害は大きい』のです（ルカ六・四九）。48:4 ですから、わたしたちは祈りましょう。『岩の上に自分の家を建てた賢い人に』似た者となるためです（マタイ七・二四）。というのも、このような建物になら、来るなら来るがよいのです。『天上にいる』『悪の』霊からの『雨』でも、わたしたちに敵対する支配と権威からの『激流』でもです。このやみの世の主権者たちからの激しい『風』でも、地の下の霊どもの洪水でもです（エペソ六・一二）。それらは、『岩の上に』あるわたしたちの建物に、打ちつけるがよいのです。それらが打ちつけるのは、働きかけてくるものたちが、害を加えるよりも、むしろわたしたちから害を受けるためです。家が倒れないだけでなく、そもそも揺り動かされもしないことによってです。48:5 そして、あなたがた二人は、それぞれ、敵対するものを打ちながら、こう言うべきです。『空を打つような拳闘はしない』（第一コリント九・二六）。

49:1 さらに、『種まきが種をまきに出て行った』のですから（マタイ一三・三）、わたしたちの魂が『その種を』受けたことを示しましょう（ルカ八・五）。『道ばた』のようにでも、『石地』のようにでも、『いばら』のようにでもなく、良い地のように受けたことをです。49:2 イエスの言葉が『道ばたに』も『いばら

の中に』も来なかったことは、わたしたちにかかるかぎりでは、主にあって誇ります。わたしたちは、語られたことを悟ったからです。ですから、『悪い者』は、わたしたちの『心にまかれたもの』を奪いとらなかったのです（マタイ一三・一九）。49:3また、『いばらの中に』まかれもしなかったことは、多くの人が、わたしたちのためにあかしをしてくれるでしょう。彼らは次のことを見ているのです。わたしたちの魂のうちには神の言葉があります。それを、『この世の心づかい』も『富の惑わし』も、生活の快楽も、妨げることができなかったのです（マタイ一三・二二）。49:4残るところ、人々が決めかねているのは、ただ一つです。わたしたちにかかるかぎりでは、神の言葉が『石地に』来たのか、それとも『良い地に』来たのか、ということです。というのも、みことばのために患難と迫害が起り、大きな試みの時が来たからです。このとき、『石地にまかれたもの』はあらわにされます。深く掘り下げず、魂の深みにまでイエスを受けいれなかった人々もそうです。しかし、『みことばを悟る』人は『実を結び』、終りまでみことばをしっかりと守ります。そして、『忍耐をもって』『百倍』の実をみのらせるのです。というのも、わたしたちは、聖書がどのように語っているかを聞いているからです。聖書は、一方では、『患難や迫害』の時につまずく人々を描いています。彼らは、聖なる教えを喜んで受けたように見えながら、根を持たず、しばらくのあいだだけ信じるので、つまずくのです。その人々について、聖書は、マタイによれば、こう言います。『石地にまかれたものというのは、みことばを聞くと、すぐに喜んで受ける人のことである。その中に根がないので、しばらく続くだけであって、みことばのために患難や迫害が起ってくると、すぐつまずいてしまう』（マタイ一三・二〇〜二一）。マルコによれば、こうです。『石地にまかれたものとは、こういう人たちのことである。みことばを聞くと、すぐに喜んで受けるが、自分の中に根がないので、しばらく続くだけである。みことばのために患難や迫害が起ってくると、すぐつまずいてしまう』（マルコ四・一六〜一七）。ルカによれば、こうです。『岩の上に落ちたのは、みことばを聞いた時には喜んで受けいれるが、根が無いので、しばらくは信じていても、試みの時が来ると、信仰を捨てる人たちのことである』（ルカ八・一三）。他方、良い実を結ぶ人々については、こう教えて言います。『良い地にまかれたものとは、みことばを聞いて悟る人のことであって、そういう人が実を結び、百倍、あるいは六十倍、あるいは三十倍にもなるのである』（マタイ一三・二三）。あるいは、『良い地にまかれたものとは、こういう人たちのことである。みことばを聞いて受けいれ、三十倍、六十倍、百倍の実を結ぶのである』（マルコ四・二〇）。あるいは、『良い地に落ちたのは、みことばを聞いたのち、これを正しい良い心でしっかりと守り、忍耐をもって実を結ぶに至る人たちのことである』（ルカ八・一五）。ですから、使徒によれば、『あなたがたは神の畑であり、神の建物である』のです（第一コリント三・九）。『畑』は良い地にあり、『建物』は岩の上にあります。そうであれば、わたしたちは、『神の建物』として、冬の嵐に向かって揺るがずに立ちましょう。また、『神の畑』として、悪い者を心にかけないようにしましょう。『みことばのために』起る『患難や迫害』も、心にかけないようにしましょう。この世の心づかいも、富の惑わしも、『生活の快楽』もです。むしろ、これらすべてを軽んじて、心づかいのない知恵の霊を受けましょう。惑わしをまったく持たない富へと急ぎましょう。そして、『楽しみのパラダイス』[1]の、こう名づけてよければ、快楽へと急ぎ進みましょう（創世記二・二三）。苦しいことの一つ一つについて、次のように考えながらです。『このしばらくの軽い患難は働いて、永遠の重い栄光を、あふれるばかりにわたしたちに得させる。わたしたちは、見えるものにではなく、見えないものに目を注ぐ』（第二コリント四・一七〜一八）。

50:1次のことも知っておきましょう。人殺しで不義なカインに殺されたアベルについて言われたことは、不当に血を流されたすべての人に当てはまるのです。つまり、次の言葉は、殉教者のひとりひとりについても言われている、と考えましょう。『あなたの弟の血の声が土の中からわたしに叫んでいます』（創世記四・一〇）。その人々の血の声が、土の中から神に叫んでいるのです。50:2わたしたちは、イエスの『尊い血』で買い取られました（第一ペテロ一・一九）。そのイエスは、『すべての名にまさる名』をお受けになりました（ピリピ二・九）。それと同じように、おそらく、殉教者たちの『尊い血』によって買い取られる人々もいるでしょう。そして、殉教者たち自身も、正しい者となっても殉教しなかった場合に高められたであろう以上に、高められるのでしょう。というのも、殉教の

死をとくに「高められること」と呼ぶのには、理由があるからです。それは、次の言葉から明らかです。『わたしがこの地から高められる時には、すべての人をわたしのところに引きよせるであろう』（ヨハネ一二・三二）。ですから、わたしたちも、自分の死によって神を高め、神の栄光をあらわしましょう。殉教する者は、自分の『死によって神の栄光をあらわす』からです。このことも、わたしたちはヨハネから学びました。ヨハネは、ペテロについて、こう言っています。『これは、どんな死に方で、神の栄光をあらわすかを示すために、お話しになったのである』（ヨハネ二一・一九）。

51:1 わたしは、できるかぎり、できるとおりに、これらのことを、あなたがたに向けて口述しました。今の闘いのために、これらがあなたがたの役に立つよう祈っています。しかし、あなたがたは、とりわけ今、神の奥義をより多く見るにふさわしい者となっているとします。そして、もっと大きく、もっと豊かで、目の前の事を成しとげるのにもっと役立つものを悟ったとします。そのうえで、これらを、子供じみた、つまらないものとして軽んじるとします。そのときには、わたしも、あなたがたについて、そのようになることを祈るでしょう。51:2 というのも、あなたがたの目の前にある事は、あなたがたのことがわたしたちを通して成しとげられることではないからです。どのようにしてであれ、成しとげられることなのです。願わくは、それが、もっと神的で、もっと賢く、人のすべての本性にまさる言葉と、神の知恵とによって、成しとげられますように。

訳注

1 創世記のギリシア語訳の句。ヘブル語からの訳では『エデンの園』。

殉教の勧め

2026年11月23日版
著者　オリゲネス
制作　藤遥
発行　christian-classics-jp
公開　https://christian-classics-jp.github.io/site/origen-exhortation-to-martyrdom/
原稿　https://github.com/christian-classics-jp/site/tree/master/books/origen-exhortation-to-martyrdom
全文を、ギリシア語原文（Εἰς μαρτυρίον προτρεπτικός）からAIを使って翻訳しました。
訳文はCC BY-SA 4.0で公開しています。引用した聖書の本文は含みません。